

立教大学
社会学部報

sociomagazine

特集

劇団四季俳優

道口瑞之さんインタビュー

社会学一年生傾向調査！

新任教員座談会

2号 2018

社会学部報 第二号

道口 瑞之さんインタビュー ……	2
食の堂にて ……	10
長 有紀枝先生インタビュー ……	14
新任教員座談会 ……	23
となりのフリーペーパー ……	30
卒業したら何するの? ……	34
社会学部一年生傾向調査 ……	37
先生の好きな○○の話 ……	38
社学生に聞いてみた ……	42
留学生コラム ……	44
癒し空間 ……	46
社会学部ゼミ紹介 ……	47
専門教育科目 1 の紹介 ……	62
助教座談会 ……	67
編集部だより ……	78

OB・OG 訪問企画

道口瑞之さん インタビュー

立教大学を卒業されて社会で活躍している先輩にお話を伺う

『OB・OG 訪問企画』第一弾。



今回は、一九九四年に立教大学社会学部社会学科を卒業されて、現在劇団四季で活躍されている、ミュージカル俳優の道口瑞之さんにお話を伺いました。

——立教大学に入学しようと思った理由は何かですか。

立教生は、昔から、群れないってイメージだったんですよ。立教出身の有名な、著名人で自分が好きな人をイメージすると、群れない人が多い。芝居の世界だと照明家も結構います。彼らは会社を作って大きくするのはなくて、

個人で活動している。群れない良さがある。人間は孤独に生まれて孤独に死んでいく。群れないで行動できるのが立教生のカラーなので、周りの意見は気にせずにどんどん突っ走った方が、良さが出るんじゃないかと思います。自分の道を歩くことができるのも立教生の強みなので、厳しい道かもしれないけど、自信を持って四年間で磨かれるんじゃないかな。

——強い意志があつて立教に決められたのですか。

実は、一番都心だったから、というのが結構大きな理由だったりするんですよ。週に一日新座に行けばいいと知って立教かなと。行きたい学部があるのは立教だけだったし。面接では見抜かれていましたけどね。「お芝居やりたいんですよ。なんでうちなの？」って。

——どうして社会学部に入ろうと思われたのですか。

単純に社会学部って面白いなって思っ
て。昔は（立教の）看板だったよね。い
わゆる有名どころの人たちってシヤカ
シヤカ（社会学部社会学科）が多かった。
まあ、どの学部もすごいからあんまり看
板って感じしないけどね。

社会学部の中では福祉を専攻していま
した。今はいろいろと専攻が分かれまし
たよね。当時はシヤカシヤカ（社会学部
社会学科）は、マスコミと一般と福祉だっ
たんですよ。だから僕、実際に老人ホー
ムに実習にも行きましたし。そうやって
授業のなかで実習に行つて、現場でリア
ルに、生で体験することが、やっぱり人
間一番大事なんだと思いましたね。いく
ら本を読んでも、ネットで調べても、人
間が一对一で対話することが大切です
ね。同じ意味で舞台もテレビや映画とは
全く別のものだと感じます。例えば

一三〇〇席の劇場でも、自分と一人一人
のお客様の対話だと思つて常に舞台上に
立っているの、それはものすごく自分
の力になっています。

——大学ではいろいろなことを幅広く勉
強されていたということでしょうか。

そうですね。それを軸にしているし、
俳優をやる人は、例えば実技の大学や美
術系の大学、あるいは早稲田大学や明治
大学の演劇理論を学ぶ学部に行く人も結
構いるんですけど、人と同じことをやつ
ても武器にはならないのがこの世界だと思
うし、ほんとは世の中つてそうだと思
うんですよ。だから人と違うことをやる
のは弱点じゃなくて武器。大学で学んだ
社会学は絶対俳優の武器になると思いま
したし、なっています、実際。

——社会学は幅広いことを学べますよ
ね。

はい。カウンセリングのゼミで卒論も
書いたのですが、指導しなきゃいけない
立場になっていたので、伝え方のベース
になっています。本をもう一回読み直し
たり、新しい本を読んだりした時に、あ
なるほどと勉強になっています。

——道口さんの立教での学生生活は、
ざっくりというところどんな生活でしたか？

自慢じゃないですけど勉強はしまし
たよ。ちゃんと単位も落とさずに、授業も
出ましたし。全部が「優」ではないです
けど（笑）。

成績がよくない科目もありましたけ
ど、しっかりやりました。俳優というの
は一つのことを掘り下げる仕事じゃなく
て、アカデミックに広くやる仕事だし、
どんなことでも俳優の勉強になるし、自
分を磨くことが全部俳優の仕事なので。
大学の授業に限定しても全部役に立った

ことですし、役立たせることができま
した。

——サークルなどは何か入られていま
したか？

当時は立教大学ミュージカルカンパ
ニーというのがありまして。実は今もあ
るんです！形を変えて。DMCでし
たっけ。ダンスの強い集団で。多分それ
の名前が、ミュージカルカンパニーの略
のMCだった気がする。都立新宿高校
ミュージカル部のOBが集まったインカ
レなんです。実はその頃のメンバーの
うち、五、六人はまだこの世界にいま
す。その頃からダンス中心だったので、今ダ
ンスの世界で頑張っている人もいます。
非公認だったのですが、そこに所属して
いました。

今でも、ミュージカルカンパニーのメ
ンバーと半年に一度みんなであつていま
す。そのたびに「昔はあんなにみんなブ

ランドバッグ持ってなかった。」って話
しています（笑）。ブランド揃えてたら、
そういうあだ名つけられちゃったも
ん。

あと、僕がいた頃よりも、女の子が圧
倒的に増えた。当時は男女比六・四つて
言われてて……だけど、今、女の子が半
分かちよつと多いぐらいなんですよ。た
まに芸術劇場の方を歩くと、本当に女の
子ばっかりだなーって。

——アルバイトは何かされていまし
たか？

やってみましたよ。コンビニから始めま
した。若いうちは深夜のアルバイトもし
てましたね。牛丼屋とかコンビニとか、
あとは、ドーナツ屋もやりましたし。週
二回とかでも深夜だと結構やっていける
じゃないですか。だから無茶してやって
いたんですけど、大学四年生になって、
もうこの道に進むって決意した時、やっ

ぱり体が資本なので、深夜のアルバイト
はやめて、早朝の喫茶店でウェイター
やっていましたね。早朝にアルバイトし
て、昼間レッスンやって、勉強もじめ
にやっていました。四年生は週一回の卒
論ゼミだけだったので、アルバイトと
レッスンをメインの生活でした。

——じゃあ、もう、充実した学生生活で
すね！

良く言えばね。親にしてみればなんの
ために学費払ってんだっていう生活でし
ただけね。

——次の質問なのですが、学生時代の楽
しかった思い出や、逆に辛かったなっ
ていう思い出はありますか？

やっぱり、あれだけ時間を自由に使え
ていた四年間ってないですよ。社会人
になると、全ての時間を無駄には使えな

くなるじゃないですか。だけど、無駄が有意義っていうこともあるじゃないですか。そういう有意義な無駄を過ごすことができていたかな。人数の少ないサークルで、あんまりお酒も飲まない集団だったんですけど、夜の十二時から明け方まで、池袋から目白までひたすらテクテク歩いたり、公園でグダーツとしゃべったり、サンシャインの下で地べたに寝転んでそのまましゃべったりとか。そういうのって、この歳ではできないことじゃないですか。この歳じゃなくても、もう社会人になつたらできないことだと思っんですけど、そういう無駄なことができる、許される、四年間だったな。

——休日もアルバイトをされて忙しかったと思うのですが、どこかに遊びに行くことはあったんですか？

まあ遊びもしましたけど、踊ったり稽古したりするのが一番楽しかったです

ね。もちろん学生劇団なので、自分たちで小道具作ったり衣裳作ったりするじゃないですか。それをすべて手作りするところが楽しかったです。お酒飲まなくても楽しかったっていうのはそういうところですかね。いわゆる「遊び」はそんなにやらなかったですね。

——辛かった思い出はありますか？

辛かった思い出ね。小道具を作っていて唯一（授業に）出られなかった時に、三ヶ月にいつべんの出席取られたこととか…？ まあでも、どんなことも俳優の勉強にはなりました。

でも、あんまりないですね。お金がなかったことぐらいですかね。僕、大学の後半は、もう今はないですが、一食の裏の四畳半のトイレ共同、二万七千円の部屋に腹くくって住んでいました。親に就職しないって言った時、もうお金もらえない、仕送りも無くなるってわかつ

ていたから、一番安いところに住もうと思つて。大学三年の後半で引越して、しばらくいましたね。最初一万一千円のところ紹介されて、二畳だったの！水道もトイレも共同。そんなところが池袋にあったんですよ。いや、でも、お金がないことが当たり前でしたからね。卒業してからのが辛かったかな。四年生に



なって、みんなが就職活動していて、週に一回しかゼミに行かない中で、どうなっちゃうんだろっていう不安はありましたけど、辛くはなかったですね。

——道口さんは、様々ある俳優業の中でも、どうして劇団四季の俳優になろうと思われたのですか？

高校生の時にお芝居の道に進む中で、地元の茨城で劇団四季の『夢から醒めた夢』という作品を観たというのもあるんですけど、漠然とした夢じゃなくてスベシヤリストにならなくちゃいけないじゃないですか、ある程度ターゲットを絞って。大学に入った時点で、ゼネラリストでありスベシヤリストでもあるミュージカルへの出演を目指そうと思っていました。ミュージカルには歌も踊りも芝居もあるから。同じ「俳優」でも、映画とかいろいろジャンルがある中で、僕はミュージカルの舞台に立ちたくて。そう

なると日本には劇団四季がある。でもそこを目指してしまうと、そこがゴールになるので、寄り道をしながら、大学卒業して、オーディション受けまくって、最終的に劇団四季に入った形です。頭の片隅にはずっと劇団四季がありました。まあ、落ち着くところに落ち着いたんだすかね、最後には。

最初にお芝居を見たのは、手前味噌だけど、小学校の時に教育テレビで放送されていた『むかしむかしゾウがきた』という作品ですね。小学校や中学校で、旅回りの劇団が来てやったりするのは見たことあるんだけど、印象としては『むかしむかしゾウがきた』が強く残っています。そしてその次が高校の時の『夢から醒めた夢』。高校で演劇部に入った時には、月に一回は東京でいろいろな小劇場を見て回っていたんですけど、ミュージカルを見て「あ！ こういう手があった」って思ってた。ミュージカルに惹かれ

てたのかなあ、もともと。

僕が劇団四季に入った時、立教から入団した人は少なくて。劇団四季の創設者で当時の代表だった浅利慶太さんに「お、立教から来たぞ！ 立教で、二年もフリーターやってたやつがバカだからうちに来た！」って珍しがられた。「落としてもいいレベルだったんだけど、まあ採ったわ」って言われてた。今は立教出身者も結構増えていると思いますね。

——劇団四季の俳優になって、よかったことややりがいがあること、また逆に大変だなと思うことはありますか？

二年間いろいろなオーディションを受けて、二十四歳で入団した時に、両親は「劇団四季？ どこそれ？」という感じだったんですけど、唯一、うちの家系で大学を卒業してた大叔父さんが「あそこは別格だ、あそこに入ったんだったら、

もうブー言わずやらせたら？」と助言してくれたのは助かりました。

でもそれ以上に、劇団四季の理念のうちの一つに、「文化の東京一極集中の是正」っていう発想があるんですね。僕が地元の高校の演劇部のメンバーと『夢から醒めた夢』という作品を見た時と同じ思いを、自分が全国公演をやることで伝えることができる。

悲しいことに実は、毎年入ってくる劇団四季の研究生って、今は三大都市圏と札幌・福岡の出身者が多いんですよ。

だけど、四季で活躍している人の中には地方出身者も多いんですよ。わかりやすくいうと、僕は茨城ですけど、北海道の一番北の奥尻島から来ている厂原時也（がんばらときや）という俳優はアラジンを演じているし、あとは南の方だと宮古島の隣にある伊良部島っていうところから来ている渡久山慶は『王様の耳はロバの耳』の主役をしている。『恋におちたシェイクスピア』主演の上川一哉は島

根県だし。

劇団四季は全国公演をやっているし、札幌や大阪にも専用劇場はあるし、あとは広島・静岡・仙台っていうような規模の都市でも定期的に何ヶ月か公演をしているので、そういう地域の人材に影響を与えられることは、とても誇りに思います。

だって、才能は平等なはずじゃないですか、比率でいったら。一〇〇人いたら、一〇〇人の中で出てくる才能って同じはずなのに、東京にいる人の方が有利なのはおかしいじゃないですか。それは、劇団四季六十五年の理念でもあるんですけど。だって、儲けるだけだったら、東京に十個ぐらい劇場作った方がいいですよ。

——逆に大変だったことはありますか？

この看板を背負っていくことの重さかな。若い俳優の目標になるような立ち居

振る舞いが求められますし。あとは立ち止まらないことですかね。歳をとるにつれ役は変わっていかなきやいけない。野球選手と一緒に絶えず上を向いて、自分を向上させなければ、この世界から引いた方がいいと思うし。これから社会人になる人にはよく言うんですけど、好きなことを仕事にするって不可能なんですよ。プロとしてやっていくってことは、嫌いになることなんですから。絶対どこかで嫌なことをやらなきゃいけないんですよ。それで嫌になるぐらいだったら、それは好きじゃないですよ。僕もこの仕事に来て、嫌なことあるけどそんなことどうでもいいぐらい好きなんですよ。それぐらいじゃないと、好きなことを仕事にしたい、とは言えないと思います。どんな仕事もそうだと思うんですけど、嫌なことがあるのが当たり前なのがプロだと思うので、それを吹き飛ばせるぐらい好きにならないとダメなのかな。

——劇団四季に入団されてから様々な役を演じられていますが、今まででいちばん演じるのが難しかった役はなんですか？

難しく苦勞した役ほど実は評判がいいんです。僕の中のターニングポイントが『ユタと不思議な仲間たち』のヒノデロという役ですかね。あれはハードルが高かった。オリジナル作品で、先輩がずっと演じていた役に、その先輩とダブルキャストのような形で勉強に入ったんですが、すぐには出演できなくて。実際、出演できるレベルまで届いていなかったんですけれど。乗り越えるには、目の前にある一つ一つの問題を一個ずつ潰していくしかないんですよ。一発逆転はないので。でも、例えばそれが、一〇〇あって、一日二日かけてようやく一個潰しても、まだ九十九あるじゃないですか。そのくらいの絶望感があったんですけど、でももう一〇〇じゃないんですよ。そ

うやって一個一個潰してようやくたどり着いたのですが、届いてないで舞台に出る方が怖いので。みつともない姿を何回もお客様に見せるわけにはいかないですよ。だからそれは本当に苦勞したけど、逆に誇りにもなったな。

——逆にお気に入りの役ってありますか？

だいたい終わった役は嫌でしょうがないんですよ。今だったらもつとうまくできると思うので。だから今演じている二つ、『ライオンキング』のスカートと、『アラジン』のジーニーはお気に入りでありますが、きつとまだまだですね。もっと多分できるんだろうけど、今が一番できていると思って演じています。

——これから、挑戦してみたい役はありますか？

最近一番興味があるのは、創作活動をするかどうかね。特に本（脚本）を書きたい。演出とか作曲とか色々分野がありますが、僕は本を書きたくて、その勉強をしていますね。先日亡くなった元代表の浅利慶太さんが「お芝居は本が八割だ」と言っていました。自分でも、最近いろいろなお芝居や映画を見ても、やっぱり本なんだなと思うようになりました。レベルを上げることは、お金かけた時間かけたりしてできるけど、元のタネのところは本なので、そこに関わりたいなと思っています。その能力があるかどうかはわからないけれど、そういう勉強を自分ではしています。

——いずれは舞台上で自分が演じるというよりも、裏方に回って脚本に関わりたいということですか？

この歳になつてから、好奇心というか、人生折り返してやれること全部やりたく

なってきた。恥かくと勉強になることがこの歳になってようやくわかってきたので。恥をかけるということは、自分の知らないこと、できないことに気づけることだったとわかったので、どんどん恥かこうと思って。恥かけたことは、その時点でもう成長できたってことだから。それに気づけて、なんでもやりたい、挑戦しようと思ったことから、本当にやりたいことが見えてくるのかな。だから、例えばものを書くにも、書く方に戻るっていう発想じゃなくて、いまは俳優として必要とされているのなら俳優をやるべきだし、ものを書くにも、書くだけじゃなくて、自分が主演して自分で本を書いて自分で演出した一人芝居をやるとか。なんでも挑戦したいなって思っています。

——道口さんが思う社会で活躍するために必要な能力はなんですか？

やっぱり、この仕事に限らず、自分をプロデュースする能力は多分必要だと思います。自分を客観的に見るってこと。劇団四季はほとんどの作品が座内でオーディションをします。『ライオンキング』とか『アラジン』とかロングランのミュージカルも、不定期で一年か二年おきくらいでオーディションをやっているんです。だから役をつかむ機会はあるけれど、自分に合わない役ばかり受けていたら永久に仕事は来ないじゃないですか。自分を客観的に見て、自分の夢と現状のすり合わせができる人が残るのになって。あとは、それを助言してくれる人と助言を聞ける力があるかどうか。その力を養うといいと思います。

——最後に、立教生に一言でいいのでメッセージをお願いしたいです。

——立教大学出身であるということはずっと付いて回ります。それをいい意味で武

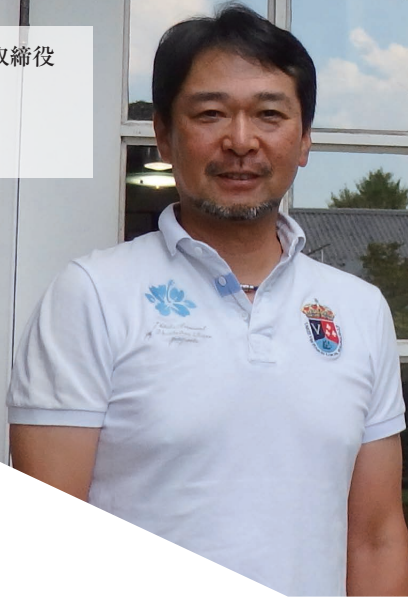
器に使える時もあります。そういうときは思う存分武器にしたほうがいい。もちろん、大学で何を蓄積したかにもよりますが、思わぬところで武器になることがありますので、それを有効に使ってください。

——ありがとうございます。

(取材：編集 松本 和花子、大澤 崇仁)

第一食堂

株式会社平井 代表取締役
平井 秀樹 さん
出身：東京都
趣味：ゴルフ



エフエム
ドアをお閉めください
致します

「ご経歴を教えてください。」
もともとはアメリカカンファ
トボールの実業団の選手と並
行して、アパレルの仕事をして
いました。祖母からこの会
社をやっているのので、継いだ
形になりますね。

人気メニューはなんですか？
カツ丼。ロングセラー

で、四〇年以上変わらない、
ちよつと甘めの味付け。男子
は丼物が多いけど、女子受け
するようなリゾットやパスタ
などのカフェメニューも増え
ました。

第一食堂の持ち味はなんです
か？

国際センターが近いので、
留学生も多いこと。今後はハ
ラルも導入していこうと考え
ています。また、メニューに
番号をつけるなど、読めなく

てもわかりやすい表示を心掛
けています。日替わりは名前
が長いから、英語で表記する
のは難しいんだけどね(笑)。
こだわりは、全部手作りで、
なるべく出来合いものを出さ
ないこと。カツも、毎日パン
粉をつけて揚げているのでサ
クサクです。

働く上でのやりがいは何ん
ですか？

OBだから、みんな後輩。
食を通じて喜んでもらいた
い。卒業して一〇年経って、
仕事の合間に食べに来てくれ
たりとかすると、嬉しいです
ね。

学生に一言お願いします。

ぜひ第一食堂を利用しな
らって、卒業後も遊びに來て
いただけたらと思います。

食の
て

飲食店といえば、食
るにはもってこい！
どこで食べる？

立教に

ご経歴を教えてください。

もともと「とんでん」の厨房でアルバイトしていて、お寿司とか握ったりしていました。今でも、貸切パーティーの時に実演で握っています。当時は就職氷河期で、消去法でバスタ屋さんで就職しました。テレビの仕事に憧れていたADの仕事をしたこともあったんですが、やっぱり激務で帰れない(笑)。

九号館の持ち味とは？

野菜を使ったメニューが多いところかなと思います。カフェの盛り付けは参考にしてアレンジしています。デイズニールアンドみたいな。いつ行っても同じだけど、ショーとかがちよっと違っていたりするじゃないですか。それが楽しい。学食も同じで、毎日一緒だとつまらない。それを

意識して日替わりを考案しています。当時はなかったんですが、十一年くらい前に、僕が日替わりを始めました。

特に印象的なエピソードは？

二三年前に、よく来ていた女子学生がすごく大きな声で「すごく美味しかったです、ごちそうさまでした!」とお礼を言ってくれたんです。その時、「ああ、やっつけてよかったな、わかってくれる人がいるんだな」と思いました。

学生に一言お願いします。

自分自身を振り返ると、ドラダラしいいてあんまり学生時代にいい思い出がなかった。やっぱり、頑張らなきゃいけない時ってあるじゃないですか。就職するでしょう。六〇年人生が変わってきちゃ

う。だから、一番人生で頑張らなきゃいけない時期なんだと思う。自分は、氷河期で大変だからと自分に言い訳して負けちゃった。一生で一番大事な時期かもしれないから、頑張って欲しいなと思います。

立教生に最も身近な堂。行きつけにすさあ、今日のお昼は

九号館軽食堂

岡田 栄一 さん

出身：神戸生まれ、大宮(埼玉県)育ち

趣味：お子さんとドラゴンボールのゲームアプリ
Mr.Childrenのライブ観戦

経歴を教えてください。

中学卒業して、調理師を目指し始めました。二〇一〇年の一〇月に現在のアイビーに配属になりました。

持ち味はなんですか？

従業員が明るいところでですね。学生との距離が近いので、通いやすいのかなと思います。常にお客さんの立場でいることを徹底していて、細やかな接客を心掛けています。

立教生の印象はどうですか？

私がここに来て九年目になりますが、おとなしくて真面目な人が多くなってきた。最近のご飯の量を「減らしてください」と言われることも増えました。

特に印象的なエピソードは？

土曜日にあるOBの宴会で、本当は持ち込み禁止なんですけど、地方から物産品を持ち込んだ人がいたんですね。

なんか臭いなど思ったら、そこで「くさや」を焼いていたんです。すぐにやめてもらったんですが、あの時は二・三日臭いが取れなかったですね(笑)。

やりがいは何ですか？

やっぱり「おいしかったです」の一言ですね。疲れが飛ぶというか。大変なことは、昼休みの行列。券売機・カウンターでの行列をさばききれない。券売機の前で迷う学生も多いので、スムーズに購入して欲しいです。

学生に一言お願いします。

スタッフにどんどん声をかけてもらいたいです。「こうして」「こうだった」って言う

レストラン アイビー



てもらえるとやり取りができて。面と向かって言いづらひのはわかるんだけどね。なんでも声をかけていただければ！

上原 謙二 さん
出身：東京都杉並区
趣味：食べ歩き

カフェテリア 山小屋

五十嵐 豊和さん
出身：埼玉県上尾市
趣味：ドライブ

ご経歴を教えてください。

スマスマの料理番組を見て、漫画の美味しんぼを見て、勉強よりも料理をやりたいと思いました。調理の高等専門学校に通って、卒業後は料理の専門学校に。その後、大宮のケータリングのお仕事を一年間。母校の専門学校の料理のアシスタントを五、六年。西洋料理を担当。かっこいいから、女の子にもてたかったです(笑)。森永フードサービスで五、六年。森永が撤退して、山小屋は西洋フードのグループ会社として存続しています。少し複雑ですね(笑)。

人気メニューはなんですか？

オムライスや、油淋鶏などの唐揚げシリーズが人気です。揚げ物と、ハンバーグなどの焼き物が好きみたいです。イベントに合わせてカレーの種類が増えたりします。

食堂の持ち味は？

お客さんと従業員の距離が近い。食券を使っていないので、直接学生の反応をもらえるところがいいところですね。

今の学生の印象を教えてください。

サークルをやっている学生が少なくなってきたように感じます。昔は放送部が音楽や情報番組をかけていました。昔は夜遅くまで学生がいましたが、今はアルバイトをしている人が多いですね。

学生に一言お願いします。

いつもありがとうございます。美味しいものを出せるように頑張っていきますので、なるべく利用していただければ、と思います(笑)。

(取材・編集
服部 莉奈、江村 知子)

兼任教員インタビュ

おさ

ゆきえ

長有紀枝

立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科・
立教大学社会学部教授



社会学部には、「兼任」と呼ばれる先生がいらっしやる。学内の他の学部や研究科にも所属していらして、社会学内でゼミは持っておられない先生たちのことだ。今回は、ゼミ紹介では扱いきれない「兼任」の先生の中から、ジェノサイドや人間の安全保障という、社会学部においては稀有な分野に専門を持たれ、認定NPO法人「難民を助ける会」(AAR)の理事長も務める長有紀枝(おさ・ゆきえ)先生にお話を伺った。

——最初に、高校時代のエピソードを教えてください。

私の通っていた県立高校は元男子校で、一クラスに五、六人と女子は少数でした。中学時代、バスケットボールをしていたので、高校でも当然のように運動部を考えたのですが、女子部があるのはハンドボールかテニスくらいでした。どちらも嫌で、結局足が早かったのを活かそうと、男女を問わない陸上部に入りました。自分では短距離に自信があったのですが、ある日顧問の先生から「お前は投てき向きだ」と言われ円盤と砲丸に転向したんです。最初はいやいやでした。でも円盤では地区大会を勝ち抜き、県大会まで行きましたよ。

それには「強豪の女子高の修学旅行が予選会と重なり、彼らが出られなかったから」という棚ぼたの理由があったんですが(笑)。で、そんなこんなで受験勉強はかなり出遅れ浪

人しまして……。

——その後晴れて大学生になられたわけですが、学部生の頃はどんな学生だったのですか？

早稲田大学政治経済学部政治学科に進学したんですが、これは高校時代に読んだ芥川賞作家の庄司薫さんの『赤頭巾ちゃん気をつけて』がきっかけでしたね。入学直後は、体育会も検討したのですが結局、政治経済攻究会という研究サークルに入り、先輩とともに原典を読んだりしていました。そんな中、学内でたまたま交換留学生募集の張り紙を見つけたんです。その時は海外旅行どころか、パスポートも持ってない状況だったのですが、なぜか「行かなきゃ」みたいな使命感が湧き応募しました。留学先はインディアナ州のデューボア(Dubuque)大学です。行かせてくれた両親には感謝ですね。行く前と行ったあとでは大きく世界の見方が変わりました。現地で受けた差別をきっかけに民族問題に、とても関心を持つようになりました。

——差別があったのですね。差し支えなければどのようなことがあったか教えていただけませんか？

今から思えば、共和党支持者の多いインディアナ州でしたからね。トランプ大統領の選挙では、ものすごく差別的なことを言う有権者がニュースに出ていたと思いますが、私にとつてあれは不思議でもなんでもなくて、まさにデジャブでした。留学時代に日々接していましたから。一番仲のよかったスリランカからの留学生は、白人のルームメイトが、彼女の顔を見た途端に部屋を出ていき、一晩たりとも同じ部屋で過ごすことはありませんでした。白人のその子にとつても、肌が褐色のルームメイトというのはショックだったでしょう。社会階層的には、「アツパーミドル」と呼ばれる大学で白人が学生の九十五%を占めていましたから。ホストファミリーが熱心なカトリック教徒で、日曜日に一緒に教会に行つたことがあります。そうすると前の人まではニコニコ挨拶をしていた神父さんが、私の番になると能面のように目も合わせてくれないなんてこともありました。こんなにあからさまなんだと思いました。

また、同じ差別という枠組みでいうと、現地で先住民である、アメリカ・インディアンのことについても学んだんですね。母校の交換留学のプログラムでは最初の一ヶ月は参加者全員でミネソタ大学を会場にオリエンテーションを受けたのですが、すぐ近くにインディアンの居留地がありましたし、

帰国前にはグレイハウンド・バスで一人旅をして、ナバホやホピ、プエブロなどの居留地を巡ってみました。知的な意味ではかなりインディアン一色になって、「先住民について勉強がしたい！」と強く思ってた。でも帰ってきてすぐに差別についての自分の誤りに気づいたというか。日本にも同じ差別があるじゃないかと。行く前からもちろん知ってはいたけれども、自分が差別される側になるまで、その深刻さに気づかなかった。自分はあまりに無知だったということに気づいて二重にショックを受けました。カルチャーショックと同時にリバースカルチャーショックにも晒された二十代の前半でした。それが大学院に行きたいというモチベーションにもなりましたね。

——大学院に行く前に一度就職をされているそうですね。その時のエピソードを教えてください。

大学院にはすぐに行きたかったのですが、浪人と下宿生活と留学とで、親の脛をしゃぶり尽くしていたこともあって、これ以上、親は頼れない。そこで、とりあえず一度就職をしてお金を貯めてから大学院に戻れたらいいなという風に考えたんです。それで高給に違いないと就職したのが外資系の銀行だったんですけど、それも浅はかです……。留学経験を

強みに英語を使える職場ということで選んだのですが、新人がいきなり沢山のお給料を貰えるはずもなく。社会人となり一人暮らしの家賃も自分で賄うようになったら貯金なんて全然できないどころか、ギリギリの生活だということに気づいたんです。だったらもう借金して大学院に行ってしまうと思つて(笑)。なまじ職場の人間関係が良くて居心地が良かったのと、目の前のことに一生懸命になる性格もあって、「私はこのままではここに居ついてしまう」と焦りもあって結局一年で退職したんです。今、自分が難民を助ける会(AAR)というNGOの理事長をしていてわかりませんが、人を育てるというのは手間とお金のかかることなので、本当に会社には悪いことをしたと思うところがあります。

そんな短い銀行員生活の中では、一度大きな失敗をしたんです。ある法人のお客様に返すはずの書類を誤って別の会社に送ってしまった。金銭面の損害はなかったのですが、信頼や守秘義務という意味では大きなことで。その時、当時とても怖かった上司が、初めて聞くような声と態度で謝っておられる姿を見て、「私はとんでもないことをしてしまったんだ」と思いました。私、それ以来間違えないんです。というか、とにかく見直しをします。論文でもそうだし、ちよつとした文章でも、誤字脱字や数詞もチェックしています。そこには

あの失敗で血の気が引いた時の経験があるかな。自分のミスで人様にもとんでもなく迷惑がかかってしまうんだということとを社会人一年目で身を以て学べたのは、大きかったと思います。

——大学院に戻ってこられてからはどのような研究をされていたんですか？

頭の中はインディアン一色で、世界の先住民全てを研究しようぐらいに思っていたんです（笑）。でもその前に日本の先住民を知らないでどうするんだと思い、アイヌの研究を始めました。アイヌの方が多く住んでいる二風谷でフィールドワークをしたり、アイヌ語講座を履修して弁論大会に出たりもしました。でもこれは最初の一步のつもりだったんです。しかし、始めてみたら最初の一步では済まなくなつて。修士論文自体がアイヌのことになりました。「現代日本のマイノリティ、アイヌ——その政治生活」というタイトルで、アイヌ系人口の多い市町村の議会選挙の投票行動の分析をしました。入りたくて入った大学院なので、自分の専門以外の講座やゼミも積極的に受講しました。政治思想史の藤原保信先生も学部生の頃から好きで、そのゼミにも参加していました。大学院の修了式の時に藤原先生がおっしゃった「アリストテ



レスの言う『善く生きる』とは何かを今一度考えてみて下さい」という言葉を今でも折に触れ思い出します。

色々思い出すことはありませんが、日本で初めてスワヒリ語辞典を作った西江雅之先生との思い出が鮮明です。とにかく先生の講義に夢中でした。何曜日だかに西江先生の授業が学部・大学院と集中していて、私の中では西江DAYでした（笑）。

雑談・冗談を含め、先生がおっしゃること全てを必死でノートに鉛筆で殴り書きして、家に帰ったら万年筆で清書するみたいなことをしていました。そのノートは今でも残っています。西江先生から学んだ白黒をつけない考え方も、私の人生の中では大きいものになりました。

この頃には傷つく経験もありました。インタビューの折に、アイヌの人に「あなたたちは私たちを利用している。どうせ自分のために研究しているんだろう」と言われた時です。帰京して、西江先生に半べそで泣きついたら、「なぜ『その通りです』って言わないの？ 研究なんて自分のため以外に何があるの？」って言われました。今ならわかりますが、当時は「えーっ」て思いました（笑）。だから難民を助ける会で難民支援の現場に入ってニーズ調査の折に「必ず物資持つて戻ってきますからね」と約束をして、実際にそれを果たした時はやはり嬉しかったですね。

——修士課程を出られたあとにはすぐに難民を助ける会（AAR）に入られたんですか？

修士を出たあと、奨学金以外に学費の借金があったので、もう一度外資系の企業に就職しました。働きながら、先住民

の支援ができる国際機関を探していた時に、難民を助ける会との出会いがありました。当時お話を聞いた外務省の方が、「先住民専門の分野で求人はないので、日本にもNGOが沢山あるから、そういうところでまずボランティアをしてみたら」といくつか名前をあげてくれたNGOの一つが難民を助ける会でした。ちょうどその話を聞く数日前に、新聞で、難民を助ける会主催の、インドシナ難民の運動会の記事を読んだので切り抜きをしていたり、読んだ本の中に難民を助ける会が書いてあったり。「その団体だったら知ってる」と思っ

て訪ねたんです。最初は週末と平日の夜の何日かに、日本にいるインドシナ難民の受験勉強のお手伝いをするようになりました。大学院時代は学習塾でアルバイトしていたのでお手の物でしたね。

しばらくボランティアをしていたのですが「いつそ職員になる？」って言われまして。お給料として提示されたのは、当時働いていた外資系の企業の三分の一ぐらいの額でしたが、お金の問題ではないとNGOの世界に入りました。ちょうど一九九〇年代で、カンボジアの和平、クルド難民、旧ユーゴスラヴィアの問題と立て続けに起こった時代でしたから、NGOを通じた国際協力にとっぷり浸かっていきました。

——AAR時代にはノーベル平和賞も受賞した「地雷禁止国

際キャンペーン（ICBL）」でも活動されたと伺っています。対人地雷禁止条約策定までの運動にも携われたようですが、どのような経緯で始められたんですか？

最初から地雷問題をやろうと思っていたわけじゃないんです。きっかけはタイ・カンボジア国境の難民キャンプで障がい者の支援を行っていた時に出会った、たくさんの方足のない人たちが、単なる紛争犠牲者ではなく、地雷の被害者だと知ったことです。ICBLは世界九〇カ国以上の千を超えるNGOの、対人地雷廃絶のためのネットワーク組織ですが、その創設メンバーが、地雷問題に取り組み始めたのもこの頃です。はじめは「政治に関わらない人道的な活動こそが自分たちNGOのアイデンティティなのに、軍事や兵器にかかわるなんてとんでもない」という意見も多くあった中、被害が増えていく実態を見て、「地雷問題は、政治や軍事の問題ではなくてNGOが関わるべき人道問題なんだ」という認識が変わっていったんです。AARでも、私がカンボジアに駐在していた同僚とともに地雷問題に取り組もうと提案したのは一九九三年頃だったんですけど、その時は「三十八度線のように地雷で平和が保たれている場所もある」と組織の反対にありました。その後私は旧ユーゴスラヴィアに赴任してしまいましたが、何か、地雷問題とカンボジアを置き去り

にしてしまったみたいな思いがずっとあったんです。でも紛争が終結し、やっと平和が来たはずのボスニアでも人々が日常生活に戻る中で戦時中に埋められた地雷の被害にあう子供たちなどが続出しました。「カンボジアだけじゃなくてボスニアも地雷原になっているんだ」と気づいて、絶対にこの課題に取り組みなければと改めて思い、日本に戻っても一度掛け合ったら、今度は地雷問題の世界的な認知も上がって、組織として「ぜひ取り組もう」となったんです。

活動を通して色んな出会いがありました。影響を受けた「人生の師匠」みたいな人もいます。除去や被害者支援の専門家、被害者というより「サバイバー」、政治的キャンペーンの間とも親しくなりました。地雷廃絶とともに進めた有志国の政府の方々も、ICBLにとっては大切な仲間です。今は、核兵器禁止条約交渉の中心におられるオーストリアの軍縮大使トーマス・ハイノツチ氏もお仲間で、ICBLメンバーとともに関係者が招かれたノーベル平和賞の授賞式でも一緒にしました。

ノーベル平和賞の授賞式ほど、洗練された式典を私はしりません。まずノルウェーの王族が入場し、おとぎ話の世界のようにラッパの演奏から始まりました。司会はおらず、来賓挨拶もなく。司会の代わりに、ピアノやバイオリンの生演奏、

ソプラノ独唱など音楽が入るんです。その荘厳さや洗練さからは、「政治的だ」と時に批判されながらも、自分たちの人権意識で活動を続けているノーベル平和賞委員会の矜持を見たいと思いました。

この年一九九七年のノーベル平和賞は、地雷禁止国際キャンペーン（ICBL）のコーディネーターであるジョディ・ウィリアムズさんとICBLの共同受賞で、受賞スピーチはジョディと、ICBLを代表して、私の「地雷の師匠」でもあるレイ・マグラスさんが行いました。ここで彼は数週間前、アンゴラで、取扱防止機能付き対戦車地雷で、除去作業中に亡くなった除去要員の話をしました。地雷禁止条約は、対人地雷は禁止しましたが、特定の装置がついているために、対人地雷と同じように人を殺傷する対車両地雷については対象とはしませんでした。除去用の金属探知機の磁場に反応して爆発する機能（アンチハンドリング・デイス）付きの対車両地雷のことです。「対車両地雷に関しては、たとえ人に被害を及ぼす恐れがあろうとも、条約では対象としない」という条約交渉中心組の妥協的な方針がなければ条約は成立しなかつたけれど、しかしその妥協は現場で除去をしている人たちから見たら命にかかわる重大事でした。彼はスピーチでこのことを言ったわけです。しかし、物事は完璧じゃないんですね。この条約で救われる命がある。条約は、はじめの一

歩でした。

そもそもこのキャンペーン、活動中から内部で常に対立もありました。それこそ除去や被害者支援など現場組のNGOと、会議室での条約交渉中心のNGO、アメリカのNGOとヨーロッパのNGO、何でもかんでも南北問題にしたがるフリカのメンバーとか、英語圏とフランス語圏の対立とか。あらゆる対立がある中で、誰かが腹をたて、席を立てて出ていこうとすると「ちよつと待って、今そんなことしてる場合？」って言うてくれたのがクエーカー教徒の団体の方です。話し合いで分裂しそうになると「ちよつと待った！」って映画のセリフみたいにいふんですよ。「今この瞬間でも地雷原では地雷の犠牲になっている人たちが出ているのに、我々は何のためにここにいるの？ 先に進むためじゃないの？」って。そうするとみんな原点に立ち戻って。条約交渉の過程では、ICBLの仲間から大事なことを学びました。

——今は、NGOでの実務家としての活動と、大学の先生・研究者としての活動という「二足の草鞋」を履かれているわけですが、大学の先生になられたきっかけなどはありますか？

修士課程を終えてすぐ、実務の世界に入りましたが、世界

の先住民の研究がしたいと思った修士時代の記憶は鮮明で研究者への思いはずっと持っていたように思います。そんなベースがある中で、出張が多い十三年のAARでの生活で、一度燃え尽きたんです。当時から、いくつかの大学で非常勤講師として教えたり、シンポジウムや講演会にスピーカーとして呼ばれたりする機会も多かったのですが、いつもそこで勉強不足や居心地の悪さを感じていたんですね。買った本はたまる一方で、読む暇もなかったこともあり、もう一度、学び直したいという思いがつのつていました。そんな中でたま人間の安全保障に関するシンポジウムのお手伝いをしたのですが、ちょうど駒場（東京大学大学院総合文化研究科）にそのプログラムができて、博士課程からでも若干名募集しているのを知りました。そこで再び大学に戻ったのが直接のきっかけです。ボスニア紛争末期にスレブレニツァで発生した虐殺事件をとりあげて博士論文を書きました。先住民からテーマは変わりましたが、人間の安全保障やジェノサイド予防など、研究者としてもやっていきたいと思っていた時に、たまたま声をかけてくださったのが立教の21世紀社会デザイン研究科の先生だったんです。社会学部への配属は、後から決まったものですが、専門外でもあり、当初は戸惑いました。しかし、着任後初めて持った「紛争と和解・共生」の授業の教え子がすぐ大学院に進学してきてくれたり、先住民研究の

阿部珠理先生にも出会えたりと、とてもご縁を感じました。

私の授業のテーマは社会学部生にとつては一期一会なんじゃないかなとも思います。あまり社会学部の他の授業では扱わないことなので。国連憲章なんて二度と読まないままの人もあるかもしれないですね。だからこそ、一回限りの出会いに終わらない何かが残るようにと、そういう思いを持って授業していますね。法学部で授業を持つこととの違いはそういうところにあるのかなって思います。

——研究者としての野望はありますか？

現在、過去、未来、という時間軸からみると、私の実務家としての仕事は、難民問題や地雷対策など、今「現在」生きている人の支援をすることです。研究者としては、紛争やジェノサイド（集団殺害）などの事件の「過去」と「未来」にかかわりたいと思っています。それは、過去に起きた出来事を詳細に分析し、記録し、明らかにし、犠牲者や加害者の声を聞くことです。学生の皆さんにも、授業を通じ、何が起きたのかということ、最低限、犯罪や人権侵害やジェノサイドが起きたその事実を知ってもらいたいと思っています。そうした作業の積み重ねが、将来・未来の類似の事件の予防につな

がると思います。その意味で、実務家として、研究者として、というより人間として、こうした事件の過去・現在・未来にかかわりたいと思っています。

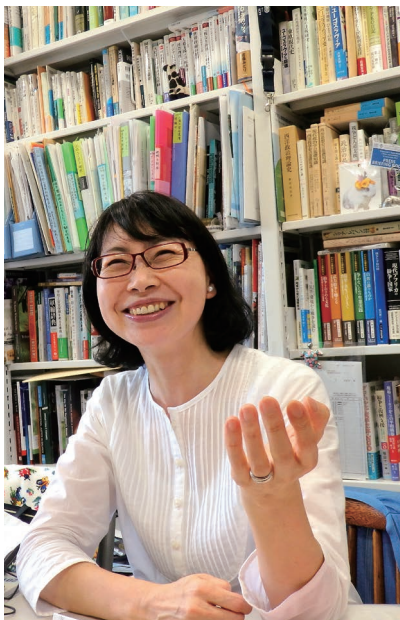
——最後に、学生にメッセージをお願いします。

一生のうちで一番まとまって勉強できるのはやはり大学時代です。専門家はウヨウヨいるし、図書館も使い放題だし。ただ、学生の時には、それがいかに貴重なことかを、なかなか気づかないんですね。でも、何とかしてそれに気づいてほしいと思います。学ばなければ、人は、今自分が居るところにしか居られないけれども、学ぶことによってどこまでも世界は広がります。ぜひ世界を広げてほしいと思います。だからって「世界にはばたけ!」って言いたいわけじゃなくて(笑)。世界を広げることで今ここに生活や人生も違って見えてくるかもしれないし、輝き出すかもしれない。大学生活では、自分が求めたものしか返ってこないんですよ。変な言い方なんですが、大切なことや重要な知恵や知識が降ってきてても、聞く耳がないと、あるいは自分がそれを欲していないと、聞き流してしまう。人生に決定的な意味を持つ、人や知識との出会いは誰にでも平等に訪れると思います。その「出会い」を「出会い」だと思えるかどうか。そのときの、

その人の心の持ちようによって、全く違うと思うんですよ。ステイブ・ジョブズの「Connecting The Dots」の話にもありますが、人生は全てが選択の連続なんだけれど、その選択は最短距離でどこかに到達するために、計算的に選べるものではない。振り返ってはじめて、あの点とこの点がつながって、今があるとわかる。何かしたいと思った時、最短距離を目指すのではなく、目の前のことに一生懸命になること、目の前の人に誠意を尽くすというのが何かにとどり着く一番の近道になるんじゃないかなとも思います。

——ありがとうございました。

(取材・編集 大澤 崇仁、服部 莉奈)



新任教員座談会



まえだ ひろき

前田 泰樹 教授 (写真左)

×

かたかみ へいじろう
片上 平二郎 准教授 (写真右)

二〇一八年度から教鞭をとられている社会学科の前田先生と片上先生に、お二人のご経歴から趣味、学生へのメッセージなどについて、座談会形式で語って頂きました。

——先生方のこれまでの経歴を教えてくださいませんか。

片上 僕は上智大学の理工学部出身で、元々は化学をやっていたいわゆる理系だったんです。高校まで自分が理系だと思っていて、化学部で実験などをしていただけけれども、入学してから三日ぐらいで早くも進路選択に失敗したと思って。勘違いしていたと言うか、例えると歴史小説と歴史学を取り違えてしまって、司馬遼太郎が好きな人が歴史学を選ん

でがっかりするみたいな感じかな。実験は好きだったけれどなにか違うなあと、授業を受けながら思っていました。そのまま大学の四年間は理工学部にいたけれど、まあやる気のない学生でした。就職活動もして、一応予備校の先生が決まったんだけど、塾の先生だったら回り道してもなれるかなと。この辺は今の就職の感覚と違うような気がします。そこでもう一回勉強するかなと思って、立教大学の社会学部に学士入学というかたちで三年に編入して、社会学を始めました。九〇年代はけっこう社会学者がメディアを賑わせている時期で、社会学ブームのものが来ていたんですよ。

前田 懐かしいですね。

片上 サブカルチャーが好きで音楽とかを聴いて、評論みたいなものを読んでいると社会学にぶつかるみたいな風潮が当時はあって。その影響で、社会学が面白そうだからやってみようかなと思って、立教で二年間勉強して、その後に慶應の修士課程に行つて、修士号を取りました。ただ、「自分のやっていることは社会学なのかな」と感じ始めて、博士課程に行くかどうか

でかなり悩んだんですね。そしてその中間を取るように、立教の文学研究科の比較文学専攻に入り、そこでいわば文学部的なかたちで研究をして、博士号を取ったあとに文学部で助教を五年間やっていました。一方そんな中で、いろいろ回り道をしたけれど、やはり自分は社会学者であるのだというアイデンティティを再確認したりもしました。そこから今に至るといった感じですよ。

前田 片上先生に比べたら僕はずっと平凡な人生を歩んでると思うんですけど(笑)。社会学をやるきっかけになったのは、高校時代にヴェーバーとかを読んで面白そうだなと思ったからです。そこから社会学部に行こうと思って一橋大学の社会学部に入ったんですが、一橋の社会学部は狭い意味でのソシオロジーだけをやる学部ではなくて、哲学や人類学、文学や言語学などが全部入っている学部でした。自分も最初は社会学問題の社会学等に関心がありました。次第に「人が人を理解するとはどういうことなのか」と、より哲学的な問題を考えるようになり、大学時代はワイトゲンシュタインという哲学者について卒論を書きました。そのまま大学院に進み修士課程で社会学論や方法論を勉強して、博士課程でフィールドに出ようと思ったんですね。初めて行ったフィールドは、脳神経外科に付属している施設で、当時失語症という表現をし

ていましたが、高次脳機能障害の患者さんたちと言語聴覚士とのコミュニケーションの分析等を中心に、研究をしています。また、その間に、前職の東海大学に就職しました。東海大学には十七年くらい居たのですが、一般教養を担当する部署だったので社会学者は何人かしかいませんでしたし、哲学者も歴史家も生物学者や工学者たちもいる環境で、そこで学際的・文理融合的な仕事をずっとやってきましたね。東海大学には医学部や病院、健康科学部という学部もありますので、様々な先生たちと医療に関係するような共同研究をするようになって、そのまま研究をしていくうちに気がついたら専門が医療社会学になっていた、という感じですよ。

——ご専門について教えてください。

片上 説明が難しいのですが、基本的には理論社会学です。一般的には社会学者はフィールドをもっていて、どこそこを研究しているというイメージがあると思いますが、はつきりとしたフィールドが僕にはなくて。本を読んだり、理論を考えたというのも社会学ですよ、ということをやっています。その中でも、主にフランクフルト学派のアドルノという人について研究しています。そのアドルノという人は変な人なんです。もともと作曲家になりたかった人なのですが、そ

の後哲学に取り組んだ。さらにそれから社会学にも取り組むことになりました。そういう色んなことをやりながら最終的に社会学をやっている、という部分が自分に似ていると感じます（笑）。すごく広く言うと、社会とは何か、社会学とは何かを哲学に似たかたちで考えるという仕事を中心にやっています。

前田 専門は医療社会学と言いましたが、他にも質的研究法とか、少し前まではコミュニケーション論を前面に押し出していたこともあり。博士論文は『心の文法』というタイトルで出版されているのですが、動機や感情や記憶といった、心に関する概念を私たちがどのように使っているのかについて、とりわけ医療現場というフィールドで見えていく、という内容でした。基本的にはエスノメソドロジーという立場から、哲学的に論じられていた問題を人々の社会的な実践の中に落とし込んでいくという作業を行ってきました。そこから段々と医療のフィールドにもう一步踏み込むようになって、もう少し医療従事者や患者さんが実際に経験されていることから、自分の問いを受け取っていくことをしばらくおこなってきた、その成果が本になりました（『遺伝学の知識と病いの語り——遺伝性疾患をこえて生きる』、二〇一八、ナカニシヤ出版）。私自身、この本には伝わってほしいと思

う語りが沢山載っているので、そういう意味で社会学部の学生には読んでいただきたいですね。

——お二人の趣味についてお聞かせください。

片上多趣味は無趣味みたいなところがあるので、とても難しいのですが（笑）。休日は主に映画と音楽と美術館ですね。僕は一九五〇から六〇年代の日本映画がとても好きなので、その時代の日活映画の端っこばかり観ています。上映機会が少ないものを観ることを優先するので、有名なものを観ることはあまりありません。ですから、人と映画の話をする機会は滅多にないですね（笑）。音楽も趣味だけど映画と同じ感じですか。読書に関してはこの世界にいと趣味なのかどうか分からないし、ポピュラーカルチャー論という授業も担当しているのので、何を読んでも何を見てもあらゆるものが社会学に吸収されてしまいます。

前田 難しいですね。

片上 いわば「何をしてても社会学」になってしまふかな。それは良くないなと自分では思っているの、純粹な趣味を作りたいんだけど、知らない映画を観ているいろいろ考えたり



するように、考え事が好きで、その考え事をしているとまた仕事につながってくるので……。

前田 話すことがいっぱいあっていいですね（笑）。私は基本的に無趣味なので、趣味はあまりないですね。昔は作曲もしていて、大学時代は軽音楽部に所属して、バンドで活動もしていたんですが、修士論文を書いている途中に両立できず

にやめてしまつて。当時は研究の道に進むことは決めていたので、そのうち論文を書くことも仕事になって、そんなに根詰めなくともさらさら書けるような気がしていて、そのタイミングでまた音楽を始めればいいと思つていたのですが、全然そんなことはなく。今も辛い思いをしながら書いているので、そんな日は来ませんでした。

片上 僕も定年まで勤められる仕事が決まつたらギターを始めようと思つてたけど、いざそうなつてもやらないだろうってことはわかつたな（笑）。

前田 そういうのありますよね（笑）。休日は音楽を聴いたり、哲学の本を読んでいることが多いんですが、趣味つていうとないかなと思います。

——お二人が学生だった頃とくらべて、今の学生はどんな印象ですか。

前田 総じて真面目だと思ひます。私が学生だった頃よりもずっと今の学生のほうがしつかりしていると。

片上 授業には出てますよね。そのことはありがたいんだけど、

ど、その真面目さをどう考えるかは難しい。というか、自分はダメ学生に属していたので。授業もややばりがちで、その時間を使って、本を読んだり、映画を見たりとかしてました。そこで得たものはむしろ今に活かされていますね。

前田 出なくてもいいですとは言えないし、そう言われて育つたとも言えませんよね（笑）。文化的に変わつてきているのでしよう。

片上 その点で言うと、やっぱり今の学生は本は読まないですね。ただ自分たちの頃も実際に大部分の学生はそんなに読んでなかったのかもしれないけれども……。もつと学生とおすすめの本の話とかして盛り上がりたいてすねえ。ちなみに最近のおすすめの本は、コレです！（前田先生の新著「前掲」を指しながら）

前田 ありがとうございます（笑）。今の学生は非常に社交的ですよね。例えば、グループワークがすぐにできるし、テキパキしててびつくりしました。私の感覚からして、社会学をやる学生はある種社会にうまく適合できないというか、私もそうでしたが、何か社会に対して不透明さをもっているところがあると思うので。コミュニケーション研究をやるのも、



コミュニケーションが苦手だからという面もあるだろうし、ところが社会学部の学生はとても社交的で、本当に素晴らししいし、少し驚きました。一方で踏み込んだ読書をしてほしいというか、しっかりと本と付き合ってもらいたいというのはあります。一冊の本と向き合って、その本の世界に内在的に関わるような読書の仕方をしてほしいです。そういうことを文献講読のゼミでも繰り返し言っていた気がします。人生の早い段階で、一冊二冊、自分の考え方を变えるような本に出会ってほしいなと思いますね。

——最後に、社会学部生に求められるものとは何でしょうか。学生へのメッセージと併せて、お聞かせください。

前田 やはり、社会学的想像力を身に付けてほしいです。実際の回りで起きている問題が、社会的な問題に見えることと、それを分析できるスキルがあればよいですね。

片上 社会学を好きになってほしいです。学生を見ると、自分の人生で起きている問題のテーマの中で収まっている印象もあります。そのことは十分にわかるし、彼らが社会の中で出会ったのはこれなんだなと思うんだけど、やはり友達付き合いと就活と、あと趣味とメディアの世界の話に興味限定される傾向が強い。社会学をやっている割には、社会と自分との関係が狭い気がするので、それが広がればいいなと思います。自分の日常生活の中に起きた範囲で考えてしまうし、社会学っていうのはある意味でそれができるから面白い学問とも言えますが、そこに閉じてはいけないとも思います。あとは、他人に興味をもってほしいというのがあります。目の前の他者との関係のあり方を考えてみてほしいですね。他人の言っていることが、何か面白いかもしれないし、それで自分が変わっていくこともあるかもしれない。もしくは、ゼミ

で発表するときなどにも、目の前に他者がいて、その人に自分が何かを伝えようとしていることを意識してほしいです。単に発表をこなすというのではなく。

前田 やっぱり僕も他人の影響を受けてほしいというというのはあります。自分の想像力を超えたところで何か出会うことがあるといいですし、大学とはそういうことができる場所なので。

片上 社会学は自分の世界を広げるものだから、そこをうまくやるための試行錯誤は必要だなと思います。

前田 立教にはたくさんスタッフがいたので、自分の好きな所に行つてできるだけ多くのスタッフと関わつて影響を受けてほしいですし、図書館もしっかりしているので、そういった場所でお会えるものにどんどん出会つて、自分を変えていってほしいです。

片上 僕は他人から影響を受けやすい人間なので、そのことを活かして社会学部の先生方から学んでいけたらなと思います。すばらしいスタッフがそろっている場所です。

前田 具体的な他人でもいいし、一冊の本でもいいので、偶然も含めて出会う機会を大事にして欲しいです。今、自分が何をやっているかというのも偶然の産物だと思います。私も最初に哲学から入つて、別に医療社会学者になると思つてもい wasn't でしたし、最初に入ったそのフィールドで良い経験ができたことが今の道に繋がっていると感ずるので、そういう出会いみたいなものが大学時代にたくさんあるといいですね。

——ありがとうございます。

(取材・編集 服部 莉奈、日出 恵輔)

となりの フリーペーパー

キャンパスの中で配布されているフリーペーパー。何気なく手にとって読んでるけど、彼らは一体何者？ 普段接近することが少ない、フリーペーパー制作サークルの全貌に迫りました！



編集部員は九人で、个性的な人が多いです。圧倒的に女子が多いですが、男子部員も募集中です。新座キャンパス所属の学生も現在四人います。

サークルの雰囲気は？

立教生にインタビューした記事や、立教生の間で話のネタになるような記事にしています。一番の売りは、ミスのファインリストも多数輩出している表紙のモデルさん。全員立教生で、部員のコネクションや、取材中に見つけた方をキャスティングしています。

サークルの特徴は？

飯泉 菜央さん 観光学部 観光学科

二〇〇四年に設立。whimとは、「思いつき・すべての面白いことの始まり」という意味の名詞。年四回発行。

制作する上でのこだわりは？

読みやすくかつファッショナブルなレイアウトやフォントを心がけていて、ページ世界観が異なるのが特徴です。取材も学内にいる立教生に声をかけています。不定期で行なっているインタビューも、立教卒業生を中心に行っています。

読者へのメッセージ

こんにちは、whim編集部です。読者の立教生、取材協力して頂いている立教生のおかげでwhimは毎回発行できています。ありがとうございます。これからも、立教生の為のwhimであるべく、皆様に支持されるようなwhimを発行できるように頑張りますので、楽しみにしていて下さい！

入手方法

【配布】両キャンパスの食堂周辺

【設置】新座（こかげ、Forest）

SUBWAY（ラック）

Twitter & Instagram でも情報を発信。

Seel

二〇〇八年に設立。「新しい価値観を提供すること」を土台として設立される。See (見て) × Feel (感じる) 学生の価値観を広げるフリーペーパー。年三回発行。

中村成さん 文学部 史学科

サークルの特徴は？

毎号一つのカルチャーに絞った特集を組み、それを「少しひねくれた視線で見ること」で記事を作成していきます。記事内容はコラム、紹介、インタビュー、デザイン重視のページ、の四つに大別されます。基本的に男性誌で、部員の多くが『POPEYE』を理想として制作しています。

サークルの雰囲気は？

部員は現在二十名強で、男女比は毎年ほとんど一対九ほどになります。学部は社会学部、文学部、映像身体学部が多いです。全員、多方面のサブカルチャーに精通しています。部員同士の仲は良いですが、どこか馴れ合いを嫌う雰囲気があるので、冷めてるサークルと映ることもあるかもしれないです。

制作する上でのこだわりは？

フォントや色彩は一号ごとにデザインイメージを作成し、ちぐはぐ感が出ないよう気をつけています。「学生クオリティ」に見えないよう、文章もデザインも校正に校正を重ねていきます。

苦勞していることは？

立教内で配布する際の提出資料が多く、検閲も厳しいことには頭を抱えています。今の段階ではとにかく設置先を増やすことを目指しています。今までのや

り方にとらわれない新しい発想の拡散方法も画策している最中です。

読者へのメッセージ

最高にかっこいい雑誌と胸を張って言えるものを作るため、部員一同命を削って制作に打ち込んでいます。是非お手にとってご覧ください。



入手方法

【配布】立教大学（昼休み）

首都圏の学園祭

【設置】首都圏のカフェ

古着屋（下北沢、新宿、神保町）

SPC

色褪せない情報を提供していきたいと考えています。社会で活躍する方々のインタビューだけでなく、学生活動の取材や立教大学の取り組み、池袋の情報紹介など、独自の視点から発信できる情報を取り上げ

ています。制作する上でのござわりは？企画・取材・デザインを全部体験できることが一番の特徴で、SPCは自分たちでやりたい！と思ったことをとことん形にすることができます。また、冊子全体に統一感が出るようにこだわっています。苦勞していることは？現在、立教大学の食堂など



【設置】図書館、HIS池袋本店、ネットカフェ@wan ※TwitterのDMでメッセージを送ってください。いつでもお届けいたします。

St. Paul's Campus (通称SPC) は一九七九年四月に創刊した、非営利目的のフリーペーパー編集・発行を行う、立教大学フリーペーパーサークルで唯一の大学公認の学生団体。春夏冬の年三回発行。

吉田彩乃さん 社会学部 現代文化学科

サークルの特徴は？

学生の視点を活かし、読者が新たな知識から興味を広げ、自由に行動するきっかけになることを狙いとして制作しています。手元に残しておきたい、色褪せない情報を提供していきたいと考えています。社会で活躍する方々のインタビューだけでなく、学生活動の取材や立教大学の取り組み、池袋の情報紹介など、独自の視点から発信できる情報を取り上げ

ています。

サークルの雰囲気は？

部員は十五人です。二〇一八年度には、五人という少人数から一気に増え賑やかにになりました。文学部や女子が多いですが、理学部、男子も入ってきています！

制作する上でのござわりは？

企画・取材・デザインを全部体験できることが一番の特徴で、SPCは自分たちでやりたい！と思ったことをとことん形にすることができます。また、冊子全体に統一感が出るようにこだわっています。

の設置が禁止されているため、設置場所を必死に探しています。また、広告料を出してもらえないお店を探すことにも苦勞しています。Twitterで活動内容などを発信するなどの工夫を行っています。

読者へのメッセージ

SPCは歴史が長い伝統的なサークルなのですが、知名度は低いです。男性にも楽しんで読んでもらえる内容やデザインを意識して制作しているので、見かけたらぜひ読んでみてください。また、部員は年中募集しておりますので、興味がある方はこちらご連絡ください！

入手方法

【配布】本館下、チャペル前

(お昼休み)

【設置】図書館、HIS池袋本店、ネット

カフェ@wan ※TwitterのDMでメッセージを送ってください。いつでもお届けいたします。

二〇二一年七月に設立。amitieとは「友情」という意味。

飯島 菜月さん
社会学部メディア社会学科

サークルの特徴は？

立教生のライフスタイルに焦点を当て、「衣食充」をテーマに「より充実した学生生活」を提案しています。写真をたくさん使っていることが特徴で、特に

グラビアにこだわっています。

サークルの雰囲気は？

部員は現在二十二名おり、男女比は一对二ほどです。制作、編集、営業の三部門に分かれて活動しています。

す。社会学部の学生がほとんどで、ファッションやカメラに興味のある人が多いです。

読者へのメッセージ

部員一同楽しんで制作活動に取り組んでいます。手に取っていただいた方々の学校生活に少しでも彩りをプラスできるようなフリーペーパーを作っています。どこかで見かけた際にはぜひご一読ください。

入手方法

〔配布〕 正門前、チャペル前、本館前

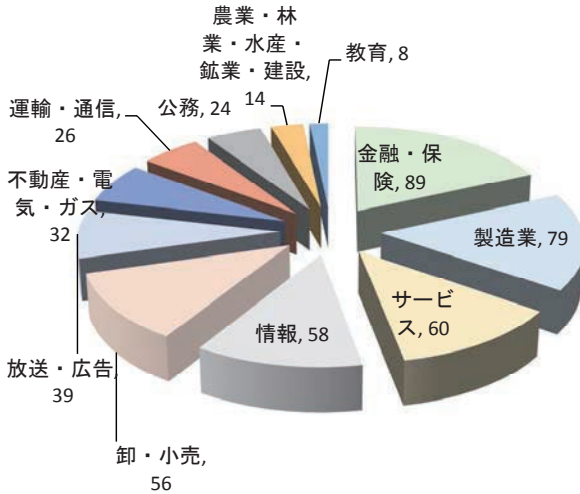
(長期休み明け・お昼休み)



(取材・編集 服部 莉奈)

卒業したら、何するの？

普通に卒業して、どっかに就職して、社会人として働く…。でも将来のことなんてわからないし、不安ばかりな大学生は多いのではないだろうか。そこで今回は、先輩たちの背中からキャリアについて考えてみようと思う。下の図は、二〇一七年度の社会学部卒業生の就職先業界のデータだ（数字は人数）。注目してほしいのは、**金融・保険業界**に進む人が一番多いという点。でも、これだけじゃなにも掴めない。じゃあ当事者に聞いてみよう。ということで、今回は社会学部OBの伊藤さんにお話をお伺いしてみた。



OB訪問 伊藤直道さん

〈二〇一八年社会学部卒 銀行職〉

社会学部卒業生の進路先で多い金融業にお努めの伊藤直道さんにインタビューしました！

（取材日：二〇一八年八月十三日）

——今の仕事の内容を教えてください。

私は二〇一八年の四月入社で、最初の研修では銀行員としての基礎のことを勉強しました。五月からは支店配属になり、九月末まではそこで基本的な事務の仕事をします。カウンターに出てお客様と接客したり、会社を訪問して企業の社長とお話ししたり、事務をすることもあります。

——入社前と今では仕事に対するギャップはありますか？

当然のことなのですが、お客様と接する職業なので、情報管理など徹底しています。また書類にミスがあるとお客様にご迷惑がかかるので、その点も厳しくチェックされます。また、プラスのギャップとしては、優秀な人が多いことですね。

——今のお仕事のやりがいは何ですか？

今の仕事、というより十月以降は法人部に配属になるのですが、そこでは一人につき数十社を担当します。そこでは、経営者の方など経営の中枢の方とお話しして、自分から経営課題の解決方法を考えて、お客様に合う提案ができれば、その会社の歴史の一ページとされるようなことができる仕事だと思っています。それは、自分がどれだけ説得力のある提案をして、論理的に説明できるかということが、会社の歴史として塗り替えることにつながると思います。そのための準備として今は事務をしています。事務も大切で、お客様の信頼を得るために大切な仕事だと感じ、日々勉強しています。

——次に在学中のことについて伺います。在学中はどのような授業、またはどんな事に興味をもたれていましたか？

私は体育会陸上競技部に所属しておりまして、それらの活動が八割くらいの学生生活でした。勉強は興味があった英語に力を入れていました。体育会では、選手という以外に幹部として携わっていて、創部九〇年くらいでしたが、それをいかに盛り立てていけるかというのにすごく熱を入れて活動

していました。

——進路を意識しだしたのはいつ頃からですか？

就活が始まるな、と思い始めたのは三年生の夏くらいで、そこからインターンシップが始まります。最初はいろいろな業界を見たいなと思ったので、業界を絞らずに、メーカー、金融、商社などを見ました。本格的に動き出したのは三年生の十二月くらいで、先輩を紹介していただいて、OB訪問を繰り返していました。

——今の会社に決めた理由は何ですか？

部活動をしている中で、部を盛り立てていくことに熱くなった学生生活だったので、その経験を生かした仕事をしたいなと思いました。それを考えたときに、銀行の法人営業という仕事を知って、創業何年という会社を、自分の努力次第で盛り立てていけるという共通する部分があって、担当者の魅力、知識、経験があれば、どんな会社でも盛り立てていけるという仕事面白いと思いました。

——学生へのアドバイスをお願いします！

どこの会社に入ればいい、ということではなくて、自分が何をしたいか、ということが大事だと思います。どんな会社に入っても、活躍する人、しない人、共通することは、人間的な魅力がどれだけあるかということだと思います。人間的魅力というのは、学生の中ではあまり差がないと思っています。学生時代のうちに人間力を高めるためにおいてほしいと思うことは、いろんなことに手を出してみる、ということですね。そのなかで、自分の可能性を広げていく、挑戦していくことが大切だと思います。そこで、中途半端にならずに、「これいいな」と思ったことに本気で取り組んでいく。そうする中でその人の魅力が出てくるのではないかな、と思います。

——ありがとうございました！

(取材・編集 吉原 優人、伊藤 元彦)

社会学部一年生傾向調査

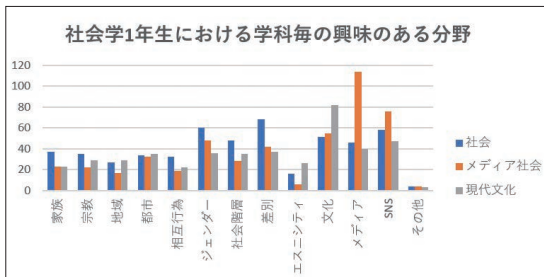
社会学科1年 近藤 孝紀

現在、立教大学には10学部、27学科が設置されている。その1つ1つが学問として個性的で魅力的なものである。では、これら多くの学部の中から社会学部を選び、それぞれ社会・メディア社会・現代文化の3つの学科からその1つを選んだ人は何に関心を持ち、何を学ぼうとして入学したのだろうか。今回は社会学部の1年生に対してアンケートを配布し、社会学についての考えや社会学の中での関心のある分野について聞いてみた。まず、社会学に対する考えを自由回答にて聞いてみた。その中でも際立って多く見られた回答が2つある。1つは、社会の見方・仕組みについて学ぶ学問であるという考えである。社会学部という名前だけあってとりわけ社会というキーワードは非常に多くみられた。2つ目は様々な・幅広いという単語を含む回答である。社会学が取り扱う範囲についてこのような反応が多く、学生が社会学の分野の多さを感じていることがわかる。

では、学生はどのような分野に対して興味をもっているのだろうか。こちらに関しては選択形式、複数回答可にて回答してもらった。結果として特に顕著だったのはメディア社会学科、現代文化学科におけるメディア、文化への回答率の高さ

である。メディア社会学科の学生の79.7%がメディア、現代文化学科の学生の58.9%が文化という選択肢を選択している。これをもって元々興味を持っていた学科に入ることができたと断ずることはできないが、学科の名前及びカリキュラムと学生の関心に確かな関係性があるといえるだろう。また社会学科に関しては他学科に対して複数の分野に興味をもっている傾向がみられた。加えて差別、偏見・社会階層・ジェンダーといった人と人の格差について言及するような分野に対して強い興味を持っていることも分かった。三学科を通して全体的に多く回答を得た選択肢は文化、メディア、SNSである。メディアに関しては半数以上がメディア社会学科の学生ということもあり学部全体といえるかは疑わしいが、これら3つのような現代的な分野が身近ということもあり高い関心を集めている。

結果として社会学の扱う領域の広さを感じながらも、それぞれの学科に基づいた興味を持っている学生が多いことが分かった。必ず何か特定の分野に対して興味を持っていなければいけないことはない。しかし傾向として学科毎に差ができていくということは普通のことに思えて意外なことなのかもしれない。



(18年度「社会調査法2」クラス、有効回答444)

	社会	メディア社会	現代文化	合計
家族	37	23	23	83
宗教	35	22	29	86
地域	27	17	29	73
都市	34	32	35	101
相互行為	32	19	22	73
ジェンダー	60	48	36	144
社会階層	48	28	35	111
差別	68	42	37	147
エスニシティ	16	6	26	48
文化	51	55	82	188
メディア	46	114	40	200
SNS	58	76	47	181
その他	4	4	3	11
人数	152	143	139	434

先生の好きな○○の話①

独りで走る悦楽

音楽社会学を看板に掲げている手前、「先生の好きなものは」と聞かれれば音楽（とりわけクラシック）と答えるのが順当な線だろう。だがそれではちょっと芸がない。他に好きなものと言えば、機械式時計とか温泉とか、広島カープとかスコッチウイスキーとか、まあそれなりにいろいろあるのだけれど、「意外な一面を知ってもらおう」という当コラムの趣旨に照らすならばオートバイの話題などいかがだろう。実を言えばワタクシ、学部生時代から現在までずっとバイク乗り、それもカワサキ一筋二十余年。乗り継いできたマシンはゼファー400に始まり、ゼファー750、エストレヤ、W650、そして現在のニンジャ250Rといたった具合である。立教への赴任が決まり前任地の鹿児島から移ってくる際、「東京なら大型バイクいらないでしょ」と妻に諭され250にスケールダウンしたが、最近やっぱりなんだか物足りないフラストレーションが溜まってきていて、そろそろまた大型に乗り換えてやろうと画策中の今日この頃。

そんなオートバイだが、ご存じのとおり快適性や安全面では四輪車に大きく劣る。なにしろ夏は暑いし冬は寒い。雨が降ればビショ濡れだし、ちょっとした転倒でも大惨事になりかねない。だがそれでも私（というか我々ライダー）はオー



ゼファー750（大学院生の頃）

井手口 彰典 准教授



ニンジャ250Rと子供たち

トバイに乗る。何故か。その模範的な解答については数年前にアニメ化もされた『ぼくおん!!』あたりを読んでもらうとして、私のごく個人的な理由を挙げれば、それはオートバイに乗っているときが一番充実した「独り」の時間になるからだ。

普段、我々は否応なく「社会」のなかに埋め込まれて生きている。また私自身が研究しているのも「社会」学だ。しかし人との関係性の網の目を毎日渡り歩いていると、時々その「社会」から一時的に退避したくなる。そんなとき、オートバイ（の、特にソロツリング）は最適だ。走っている最中はメールもSNSも必然的に無理だし、誰と会話をすることもない。黙々と高速道路を飛ばしていると、普段はゆっくり考える暇もないあれやこれやについて思いを巡らせることができ、新しい論文の構想

なんかも湧いてくる。

昨今、若い人たちは「ぼっち」がとにかく嫌いなんだとか。「孤独、即、悪」というわけだ。だがそれは実にもつたいない話だ。オートバイに限らず、独りでひたすら本を読んだり音楽を聴いたり、あるいは旅に出たりするのも、学生の間を経験しておいて損はないと思えますヨ。

先生の好きな○○の話②

私の好きな北海道の話

社会学部兼任講師 福重清

私は北海道が好きだ。

別に北海道出身というわけではない。生まれは東京だ。

しかし、いや、だからこそ北海道が好きなのかもしれない。

北海道には美しい風景がある。豊かな自然がある。新鮮な海の幸、美味しい山の幸がある。

いずれも東京ではなかなか得がたいものだ。

だが、こう感じるのは、私が今、東京にいるからかもしれない。

東京には北海道では得られないものがある。それは圧倒的な経済的豊かさであり、圧倒的な利便性だ。

私は鉄道も好きで、北海道のローカル線も大好きだが、一本列車に乗り遅れたら数は数時間後というようなところが北海道にはざらにある。

北海道にはできれば経験したくないものもある。冬の厳しい寒さと深い深い雪だ。北海道の人は、これと一年の約半分を闘っている。

北海道は人口減少も著しい。街の中に廃墟がごろごろしているようなところもある。



人里から少し離れたところにあるローカル
駅（釧網本線美留和駅）



美しい釧路湿原の風景

北海道の現実には厳しい。
そこにきて今般の地震である。とても心が痛くなる。
そんな厳しい現実には直面している北海道だが、やはり私には魅力的なところである。
私は北海道が大好きだ。

(取材・編集 戸川 凜葉)



美幌峠から眺めた屈斜路湖



釧路の大通りに面した廃デパートと廃店舗、
廃テナントビル



停まる列車は1日上り5本、下り6本のみ

社学生に聞いてみた。

「課外活動

何してる？」

白川 静紅さん



小学生の頃『アナウンサーになりたい』という夢を抱き、大学進学の際もテレビ業界への憧れから東京へ上京することを決意。社会学部メディアア社会科学科三年の白川静紅（しらかわしずく）さんは現在テレビ局のアルバイトで、生放送番組を支える裏方スタッフを務めている。生放送の番組で、リアルタイムでアンケートを取り、その集計を行ったりするそうだ。生放送かつ放送に反映される業務で、責任も重大だ。

「テレビ業界に進むなら、東京しかない。地元愛知よりも東京は圧倒的に情報が集まってくる。」夢への強い思いを持ち上京してきた彼女だが、入学当初はテニスサークルに入り、他にもサークルを掛け持ちし、居酒屋でアルバイトを始めた。「大学生活は沢山遊んで楽しめればいいや。」そう思っていた。

立教大学に入学して間もない頃に、東京の大学に進学していた高校時代の先輩から（私が働いている）テレビ局アル

バイトの募集をしているんだけど、面接受けにこない？」と声がかかり、期待を胸に面接を受けに行った。その面接は想像以上に本格的で、結果は不採用。「このまま遊んでいちやダメだ」と強いシヨックを受けた。それから「自分の糧になる経験をしていきたい」と決意し、大学一年生の夏には今まで入っていたサークルも、居酒屋のアルバイトも全て辞めた。決断は早かった。

大学一年生の夏休み、あるテレビ局のイベントスタッフをした。朝から晩まで、暑い中声を出し続けて体力的にきつい環境で働いたが、人を楽しませることにやりがいを感じ、テレビ局で働くことへの想いは再び大きくなっていった。そんな時、転機は突然訪れる。かつて先輩に勧められ面接を受けに行ったテレビ局のアルバイトから補欠合格の電話がかかってきたのだった。

晴れてテレビ局でのアルバイトがスタートした。同期は十人。最初は周りの

優秀な同期に圧倒され、一度面接に落ちた自分がいってもいいのだろうかとか劣等感を抱いたこともあったが、テレビの生放送の裏側を見られたことへの高揚感や、だんだんと仕事に慣れて行くにつれて自分の仕事がテレビ放送に携わっていることに大きな喜びを感じた。一つの番組を作るだけでも何百人もの人が協力している。「番組はチームで出来上がっているものだから、自分だけじゃなくてチームで協力するとこんなに面白いことができるとだ。」それを知ることができただけでもテレビ局のアルバイトでの学びはとて大きかった。

テレビ局でアルバイトを始めてから、漠然と憧れを抱いていたアナウンサーよりも制作の面白さに惹かれていったという。「自分が作ったフリップが番組放送で使われているのを見ると、嬉しい。裏方で大きなプロジェクトを動かす一員として番組に携わる方が自分にあっているかもしれない。」

アルバイトを通して番組制作の甘くない現実を知り、それでもあえてその道を目指す理由は何か。「公共の電波を通じて発信した番組に対して、視聴者の方々から予想もしていなかった意見を返してもらうことがある。テレビは斜陽産業と言われているけれど、見てくれている人が沢山いて、思いが伝わっているということ現場にいたからこそ気づくことができた。これはテレビでしかできないことだと思う。だからまだまだ携わってきたい。」（取材・編集 渡邊 理紗子）



白川 静紅 - Shizuku Shirakawa
2016.3 愛知県立旭丘高等学校 卒業
2016.4 立教大学社会学部メディア社会学科 入学
砂川ゼミ所属。

2つの世界——日本と中国の大学

大学院・社会学研究科 修士課程 李 聡智

——「李さん、なぜ日本に来たの？」

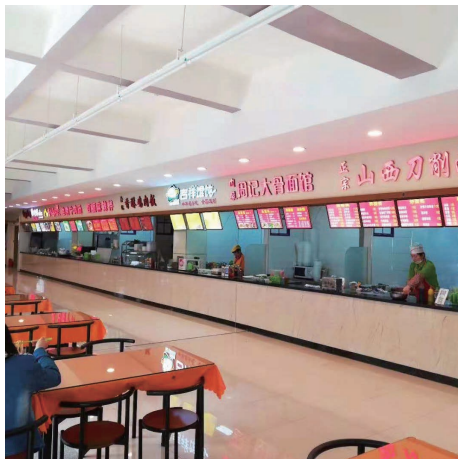
「李さん、なぜ日本に来たの？」それは私が日本に来てからよく聞かれる質問です。実は、理由は非常にシンプルでした。中国では、大連外国語大学に入学し、日本語を専門にして勉強していました。その二年生の時に、提携していた城西国際大学（千葉県東金市）が留学生を募集に来たのです。それを契機に日本に留学し日本で三・四年生を過ごしました。そこで女性学に出会い、卒業後、女性に関する事情をもっと勉強したいと思って、頑張つて立教大学大学院に入学しました。この三年間、学校生活にお

いて日本と中国との違いを実感してきました。

——カルチャー・ショック1…大学は生活の場ではなくなった？

大連外国語大学では、学生寮はキャンパスの中に建てられており、クラスメイトと四人の相部屋で暮らしていました。キャンパスではそれに加えて、スーパー、フードコートのような各種料理のブース、レストランもある「総合棟」があり、お店は二十一時まで営業していて、学生寮への出前もできました。キャンパスには浴室、美容室も整備されていて、まるでコミュニティのようでした。プライベートの面ではちょっと不満がありました。生活は便利で賑やかでした。

日本に来到ると、アパートは学校から遠く離れたものとなり、電車で通学する



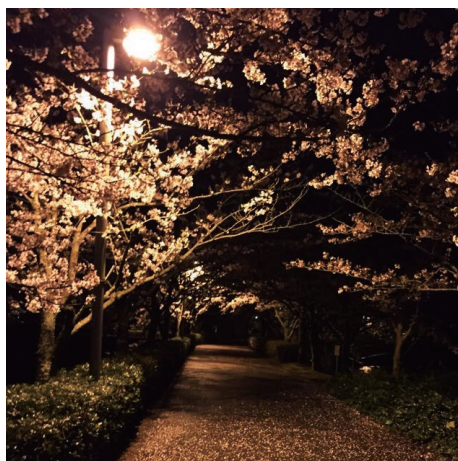
大連外語大・総合棟

ようになりました。田舎なところだったので、電車一本間に合わないと言葉に行かなくても良いという状況でした。食堂も午後四時ぐらいには早々と閉まり、コンビニのお弁当や袋入りのパンしか食べられませんでした。でも四年生の時に、夜八時に図書館が閉館した後「ピアノ池」を通り、桜並木を通って大学から出て駅へ向かうことは、私にとって美しくて貴重な経験になりました。

——カルチャー・ショック2…大学院はこんな風に授業するの？

二〇一八年四月、立教大学大学院・社会学研究科に入学しました。大学院の授業は、学部とは随分違うのだと感じました。クラスは輪読の形でおこなわれるのが一般的で、学生の数も少数です。中国の大学院で勉強している友達と授業の話をするとき、「へー、大学院はそんな形で授業するの!？」と言われました。彼らの学校では、授業は普通、何十人規模でおこなわれ、百人を超える授業もあるそうです。個人発表もあまりなく、主に先生が講義する形を取ります。

中国の大学と日本の大学との間には、数え切れないほど違いがあります。その違いを体験するのも興味深いと思います。立教の大学院で経済、ジェンダー、開発、環境、宗教、政治など、多様な幅広い分野の知識を自由に楽しみながら、絶えず新しいものを見つけられ、とても刺激的に勉強しています。日本へ留学して、本当に良かった！



城西国際大・桜並木



癒し空間

一本館二階

立教大学池袋キャンパスのシンボル、本館。ツタと赤いレンガ造りが印象的なこの本館は、米国聖公会宣教師アーサー・ラザフォード・モリス氏の寄付によって一九一九年に建てられたことから「モリス館」とも呼ばれる。

一九九九年には、景観上重要なものとして東京都選定歴史的建造物に指定された。クリスマスの時期になると、本館前にある二本の杉の木に光が灯され、幻想的な光景が広がる。

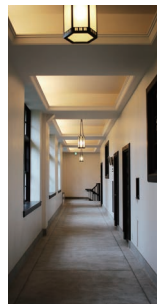
本館の教室は比較的少人数の授業に使われることが多い。外から見ると細長く、あまり広そうには見えないこの建物の二階に、意外にもゆっくりと過ごせる空間があるのをご存知だろうか。

東側の階段から二階へ上がると、パソコンが七台据えられたこぢんまりとした自習ス

ペースがある。学内の他の自習スペースに比べて、外から光が入ってくるので開放感があって心地よい。人の出入りも少なく作業が捗りそうだ。

二階の中央の方へ向かうと、小さな休憩所ともいえそうな場所がある。壁に沿ってベンチが向かい合わせに並んでおり、大きな窓から光が差し込んでくる。窓からはちょうど真下に池袋キャンパスのメイン通り「四丁」が見える。外のベンチでのんびりするのにも良いが、ほっと一息つきたい時にはこちらでゆっくりしてみるのも良いかもしれない。

(取材・編集 渡邊 理紗子)





社会学部 ゼミ紹介

“ゼミに関する情報が少なくて
どのゼミがいいのか分からない…”

そんな声をよく聞きます。

だから、まとめてみました。

社学生必見！！

社会学部ゼミ紹介

社会学部の三年次から始まる「専門演習2」ではどのようなゼミが開講されているかわからない……そんな社学生の助けになればと思います、先生やゼミ生から各ゼミについて調査しました！

- 1 先生の専門分野
- 2 二〇一八年のゼミのテーマ
- 3 ゼミ合宿の活動及び活動場所
- 4 ゼミ生の特徴
- 5 このゼミに入った理由
- 6 どのようなゼミにしたいか
- 7 どんな人にゼミに入ってもらいたいのか

* 4・5はゼミ生に6・7は先生に伺いました！

社会学科

李 叟珍

(二〇一八年代講・兼任講師 跡部 千慧)



- 1 労働社会学、比較社会論
- 2 仕事の社会学
- 3 班ごとに文献講読@埼玉県秩父市
『転職の社会学』『変わる働き方とキャリアデザイン』など
- 4 和気あいあいと、意見が出しやすい。落ち着いている。男子学生が多い。
- 5 これから働くにあたって、社会の労働環境について知りたいと思っただけから。
- 6 労働社会学の奥深さを分かるゼミに、仕事への興味や働く人への関心をもてるゼミにしたい。
- 7 考えることが好きな学生、将来の自身の仕事について想像するのが好きな学生。

松本 康



- 1 都市社会学
- 2 都市再生の文化戦略
- 3 創造都市ネットワークに登録された金沢市に行き、グローバル時代における都市政策と都市文化との関連について多角的に研究。フィールドワークや市役所の方から聞き取り調査を行い、金沢市の文化政策、まちづくり、観光政策などに焦点を当て、現代都市政策の特質を考察。
- 4 活気があり、皆仲が良く、雰囲気の良いゼミ。女子の比率が高い。松本先生は一人物静かだが、実はとても明るく、ノリのいい方で、いつも学生と同じように盛り上がり、学生目線で接してくれる。
- 5 高校時代に短期留学したポートランドで都市や観光資源について興味を持ったから。

6 松本ゼミの「ゼミの三カ条」

- ・明るく、楽しく！
 - ・連絡を密に！
 - ・ほんのちよつとの勇気を！
- 7 「社会学」に閉じこもらず、いろんな分野に関心のある学生を求める。

小倉 康嗣



- 1 ライフストーリー研究、生の社会学
- 2 ライフストーリーの社会学——他者の生と自己の生との出会いと対話。
- 3 千葉県の白子。各グループの研究テーマについて、先生と四年生の前で発表をおこない、議論。
- 4 メリハリがしっかりしている人が多い。誰もが人の話に耳を傾け、愚直な意見が活発に飛び交う。
- 5 先生の授業が楽しかったから。自分を見つめなおせるゼミに入りたかったから。
- 6 思う存分悶々とできる、のびのびと悩めるゼミ。自分をごんじがらめにする枠に切りこみが入るときの快感と、沸々と湧いてくる生きる力を体感できるゼミ。
- 7 自分に正直に、他者に正直に向きあえる人。

吉澤 夏子



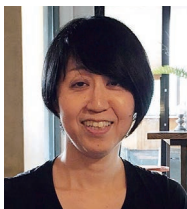
- 1 ジェンダー論、現代社会学論
- 2 毎年同じですが、「私と世界の関係を考える」。
- 3 合宿は行なっていない。
- 4 それぞれのキャラにエッジが効いている。
- 5 色々なことを広く深く考えることのできる人たち。いい意味で「都市的」。
- 6 理論や現代思想に興味があったから。授業で吉澤先生にお世話になる機会が以前からあったから。
- 7 ゼミ生一人ひとりの「問題関心」を全員で共有したうえで、さまざまなテーマについて活発な議論ができるゼミ。
- 7 自分の「考え」をもって主体的にゼミに関わろうとする人。

前田 泰樹



- 1 医療社会学、質的研究法、理論社会学
- 2 エスノメソドロジ
- 3 箱根湯本
- 4 箱根に行くまでと行ってからのフィールドノート作成・発表。
- 5 不規則に欠席してしまいが発想豊か。おだやか。
- 6 エスノメソドロジは人々の行動から考察する学問なので、幅広い内容の研究ができると思ったから。
- 7 参加者の関心の多様さをたまちながら、データの分析や議論をつうじて思考を深めていく場にした。
- 7 自分の立てた問いを真面目に面白がれる人がよい。

岩間 暁子



- 1 家族社会学、社会階層論、弱者・マイノリティ論。
- 2 格差・不平等の社会学——階層・ジェンダー・民族／国籍の視点から
- 3 河口湖で三年・四年の合同ゼミ。四年生の卒業論文中間発表会を中心に、ディスカッションなど。
- 4 しつかり、穏やか、アットホーム。
- 5 格差・不平等というテーマに関心があつたから。岩間先生の授業を受けたことがあり、もっと教わりたいと思ったから。
- 6 一人一人の主体性を大切に、楽しく、お互いに学び合えるゼミ。
- 7 視野を広げたいと思っている学生、深く考えることが好きな学生、お互いの個性や多様性を大事にしたい学生、社会問題に関心がある学生。

片上平二郎



- 1 社会学理論、現代文化論
- 2 アイデンティティ、コミュニケーション、文化
- 3 千葉県の房総半島
- 4 個性豊か。穏やかでかつちりしたゼミのイメージを覆すような雰囲気。
- 5 各自が自分の好きなテーマについてとんとん研究できるゼミだから。既にやりたことがある人、ない人、どちらにもオススメ。
- 6 真面目に物事を考えることと、自由に楽しくやるのがメンバーの中で重なるようなゼミにしたい。
- 7 好奇心が強い人。他の人の話にも興味を持ち、コミュニケーションの中で自分が変わっていくことを楽しめる人。

村瀬洋一



- 1 政治社会学、社会階層研究、統計的社会調査法
- 2 行動科学と計量社会学
- 3 千葉県白子町
- 4 三年ゼミ論と四年卒論の構想発表会。論文の目的と仮説、先行研究の批判について発表と討論。
- 5 ゼミは自由で和気藹々な雰囲気。結構仲間となる。
- 6 統計をやっていたから。社会学部生としてなにか実用的な力を身につけたいと思った。データ分析の能力が身につけたかったから。
- 6 お互い良い刺激を与えあえるゼミ。統計分析の難しいところを教え合ったりするなど助けあえるゼミ。卒業しても会いたいと思えるようなゼミ。
- 7 何でも自主的に取り組む、やる気がある人。PCや数学が得意でなくてもデータ分析や統計を学びたいという気持ちがある人。地道にコツコツとやることができる人。

西山 志保



- 1 都市社会学
- 2 都市・地域社会のコミュニティ
- 3 四年生の卒業経過報告、skitrus法によるディスカッション練習@那須サンパレー
- 4 和気あいあいとした雰囲気、ディスカッションを通して意見交換や知識の吸収を行う
- 5 地域コミュニティに興味があったから、ディスカッションメインで自分の発言能力・ファシリテーション能力を伸ばせろと思ったから
- 6 メンバーがお互いに能力を高め合うような関係性を築き、自分の生きる軸を作っていけるようなゼミにしたい。
- 7 問題意識の高い人、積極的に自分の枠を広げ、他者とかかわっていきける人に来てもらいたい。

野呂 芳明



- (二〇一八年代講・兼任講師 福重清)
- 1 交流と相互支援の社会学
 - 2 伊豆の修繕寺 修繕寺の街歩き、後期の研究についてグループ分けを行なった。
 - 3 明るく、とても意見が言いやすいような雰囲気。自身の興味などに先生方も共に考えてくださるので、とても勉強しやすい環境。
 - 4 地域再生やまちづくりに関心があったので、このゼミなら自身の研究に深く繋げられるだろうと考えたから。
 - 6 一人ひとりが真摯な課題意識を持つて討議のできる、実りの多いゼミ。
 - 7 世の中の出来事に好奇心を持ち、考えるのが好きな人。

現代文化学科 貞包 英之



- 1 消費社会論、歴史社会学
- 2 消費社会とわたしたち
- 3 山形市の商店街、観光地など街歩きを中心にフィールドワークし、BBQを行ったり温泉にも入った。
- 4 穏やかな、優しい、慎ましい。
- 5 研究分野が広がったため。説明会での先生の雰囲気が決めた。
- 6 気兼ねなく意見が交わされるゼミ。
- 7 積極的に発言できる人。

小泉 元宏



- 1 芸術の社会学、文化政策、ビジュアル社会学
- 2 アート（美術、音楽、映画、演劇など）／現代文化／コミュニティ
- 3 鳥取で地域社会の課題の検討、新潟でアートプロジェクトを訪問。
- 4 個性的で自分の「好き」を持っていて大切にしている。
- 5 フィールドワークやディスカッションが積極的に行われているから。もともと現代アートや映画が好きでアートに関わる研究がしたかったから。
- 6 各ゼミ生の考え方、物の見方が広がるよなゼミ。
- 7 想像力を広げたい人、また多様な学生がいることを望む。

太田 麻希子



- 1 人文地理学、都市論、ジェンダー研究
- 2 グローバリゼーション時代の都市と地域
- 3 伊豆高原で研究発表やBBQ、テニス、公園散策。
- 4 誰でも発言出来てアットホームな雰囲気。全員の個性が強い。
- 5 グローバルを押し出している。先生のキャラが良かった。説明会が興味深かった。
- 6 各々が卒業論文でテーマを見つけ完全燃焼できるゼミ。
- 7 選考を通った人。

石井 香世子



- 1 国際社会学、エスニシティ論
- 2 グローバル化と多文化共生
- 3 沖繩
- 4 アットホームでのんびり。
- 5 興味関心
- 6 楽しく為になるゼミ。
- 7 やる気のある人。

高木 恒一



- 1 都市社会学。特に住宅政策を中心とした都市政策、都市における市民活動。
- 2 「集まり」から都市を考える
- 3 なし。ただしゼミ生からの希望があれば実施する。
- 4 「自分でとにかく悩み、考え続けていく」ことを求められるゼミであり、先生も学生の自主性、考えをとっても尊重して見守ってくれている。
- 5 都市、そして人々の「集う」という行動に注目すれば、自分の興味あるテーマについて自由に研究できる。
- 6 ゼミ生一人一人が、自ら考え、行動するゼミ。
- 7 積極的で、知的好奇心が旺盛な人。

関 礼子



- 1 環境社会学、地域環境論
- 2 フィールドから環境Ⅱ社会を読む
- 3 今年は福島県檜枝岐村でフィールド調査を行った。調査は①歌舞伎、②食文化、③村民のテーマでグループにわかれ、村民への聞き取り調査に歩き回るかたわら、美味しい食事と温泉に癒された合宿だった。
- 4 一言でいえば、マイペースな集団。いつも穏やかな雰囲気だが、ときどき関先生から直球の質問や課題がいきなり飛んでくるので、みんなそれを必死に打ち返している。
- 5 関先生が担当する「環境社会学」をきっかけに関ゼミに興味をもち、地域特有の歴史や文化、観光について学びたくて入ったメンバーが多い。
- 6 偶然に出会って、一緒に学び合った仲間が生涯の友人として付き合っていけるようなゼミ。
- 7 フィールドで出会う人々と向き合うことで、いつもとは違う自分を見つけたら、変化していく自分を感じてみたいという学生。

木村 自



- 1 文化人類学、民族誌
- 2 文化の「間」、「間」の文化
- 3 宮古島／島の歴史、土地、文化、産業に関する調査・住民との交流、民泊、海。
- 4 明るく、仲良しだが真面目にやるときはしっかりやる。ゼミ終わりにみんなでご飯に行ったり楽しく活動している。
- 5 先生の明るくゆったりとした人柄／先生の授業を受けていたため。
- 6 だれもお互いに協力し合い自主的に学び、教員が何もしなくてよい楽なゼミ。
- 7 優秀な人。

小池 靖



- 1 心理ブームからスピリチュアルまで。
- 2 宗教学／セラピー文化
- 3 横浜中華街にて、課題の文献についてゼミメンバー全体で考察をおこない、教授から総括とフィードバックを頂いた。
- 4 自発的に発言する学生や協調性のある学生が多い。そのためゼミ生同士のコミュニケーションは円滑で、誰でも馴染みやすいアットホームな雰囲気。
- 5 ゼミの実施時間をのばさない、夏休みに合宿をしないなど、ゼミ以外の学生生活を大切にしたい先生の方針に共感したため。
- 6 アカデミックな議論・作文ができる人を要請したい。また、一人ひとりの興味関心をつきつめて、十六年間の学校教育の締めくくりにふさわしい卒業論文を書けるように指

- 7 現代人の生き方、価値観、精神に関心が導している。
ある人。文化／音楽／エンタテインメントに関心が高い人。Phone／アップルコンピュータ／英語圏の文化が好きな人。

水上 徹男



- 1 グローバル社会論
- 2 グローバルな人の移動と大都市のエスニック社会
- 3 群馬・草津にて、二泊三日の三・四年度同ゼミ合宿。各々が設定した研究テーマを調査・研究結果を発表。
- 4 一人一人の主体性が高く、エスニックやグローバル的な事象に興味のある学生が集まっていて、アットホームなゼミ。
- 5 様々な国に行く中で、想像を遥かに超える場所や人々に出会い、漠然と「海外」興味を持ったため。
- 6 フィールドワークに基づく実証データの収集やそれ以外の理論的な背景についても学習してほしい。
- 7 共に考え、共に学ぶ姿勢を大切に、積極的に参加する人。

阿部 治



- 1 環境教育／ESD（持続可能な開発のための教育）
- 2 十年以上継続している「蝶の道」プロジェクト。蝶を切り口に池袋西口の「人と自然」「人と人」「人と社会」をつなぎ持続可能な地域づくりにつなげる。
- 3 沖縄県やんばるで環境教育の実践、エコツアーリズム、基地と環境問題などの聞きとり。長崎県対馬でESDのアクションリサーチ。
- 4 地域活動が主なため、主体的に参加するゼミ生が多い。
- 5 環境教育やESDに関心があったり、自然が好きであったり、まちづくり、観光、農業に関心があったりと様々。
- 6 ゼミ生たちが主体的に参画し、かつ、学内外に積極的にはたらきかけていくゼミ。

- 7 前向きに他者（人や自然）に働きかけていく人、社会に対する問題意識を持っている人。

メディア社会学科

井川 充雄



- 1 メディア社会学、マス・コミュニケーション論、メディア史、地域メディア論
- 2 メディア文化史
- 3 陸前高田で被災地見学、春学期と夏休みでの研究成果を、各グループ毎に約一時間発表。
- 4 個性豊かでアットホームな雰囲気
- 5 井川先生の授業で発言を褒めてくれたこと、挙手して発言する学生の積極性を買ってくれるため。
- 6 学生自身を持つ問題意識を磨き、それをグループで積極的に調査、考察するゼミ。
- 7 好奇心旺盛で、学問することにやる気のある学生。

橋本 晃



- 1 ジャーナリズム研究、欧米ジャーナリズム思想
- 2 メディアと思想
- 3 長野県野尻湖湖畔の家族経営の宿。4年生卒論中間発表、3年生個人研究中間発表、ゲストスピーカーカー講演、バーベキュー、宴会、等々。
- 4 比較的人数が少ないため、横の繋がりはもちろん、三・四年生の縦の繋がりもあり、アットホームな雰囲気。
- 5 教授の専門分野に捉われず、自分が興味のある内容や疑問に思う内容など、自由に研究テーマを設定できるから。
- 6 リパブリック（共和国）の語源となったレース・プーブリカ（公共のこと）がらについて情熱をもって語れるゼミ。プライベートな欲望が飽和した時代だからこそ。
- 7 自らのみを頼りとし、自身を耕し、もって、より自由な生きようとする人。

是永 論



- 1 コミュニケーション論、情報行動論、相互行為論（エスノメソドロジー）
- 2 文化とメディア・コミュニケーション
- 3 逗子にてグループ別に研究成果の報告。
- 4 自由奔放。サークルに入っていない人が多いため、各々が好きなように活動。
- 5 是永ゼミの研究対象が幅広い分野に通じるテーマだと魅力を感じたから。
- 6 新しい考え方を生み出すための手がかりが、人との交流を通じて得られるようなゼミ。自分のテーマをしっかり持つて、周囲と共有しながら追及してほしい。
- 7 第一に自主性を持つこと。また、ことをデータにすることが多いので、細かいことでも好奇心を持ちつつ、根気をもって取り組める人。

木村 忠正



- 1 ネットワーク社会論、メディア・コミュニケーション論
- 2 メディア・コミュニケーション研究、インターネット社会研究
- 3 草津にて二泊三日（内一泊は四年生と合同）。夏休みにおこなった調査や卒業研究計画について発表、草津観光。
- 4 体育会やサークルに勤しむ人もいれば所属していない人など様々。遊びにもゼミにも本気になれる人が多い印象。
- 5 大学の貴重な二年間を遊びにも学習にも本気になれる環境で過ごしたかったため。
- 6 ビッグデータの時代に、データに振り回されず、卒論研究に取り組むことで、高度なデータ収集、分析能力を涵養するための多様な活動展開を目指す。

7 ゼミのモットー：「Be a Knowledge Professional（知の専門家であれ）」に共感し、自らを高めてゼミ活動に主体的に取り組む意欲のある学生。

井手口 彰典



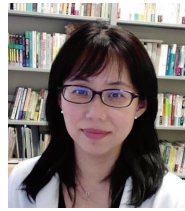
- 1 音楽社会学
- 2 音楽社会学
- 3 返子の旅館で四年生の先輩たちの卒論構想発表を聞く。
- 4 馴れ合いし過ぎることなく仲良く、のびのびとしている。
- 5 音楽が好きだから、異なる音楽の趣味の人と知り合えるから、三年から個人研究に取り組めるから、等々。
- 6 音楽のように、鳴り響くと同時に消えていく、一期一会のゼミ。
- 7 音楽が大好きで、かつ、大好きなその音楽を相對視できる人。

和田 伸一郎



- 1 デジタル・メディア論、情報社会論、社会思想、人工知能における哲学・倫理的問題、Pythonを用いた機械学習、ソフトウェア・スタディーズ
- 2 SNSデータ (Twitter, Instagramなど) の分析
- 3 軽井沢白馬リゾートにて一泊二日。三年ゼミにおいて前期から四人程度の班で取り組んできたSNSデータ分析の研究報告会
- 4 それぞれ個性を持ちながらも優秀な生徒が多い。グループごとやゼミ全体で互いに助け合う姿勢がある。大学という高等教育機関に存在するべきゼミナールの一つの完成形と呼べる雰囲気。
- 5 過度なデジタル化によって情報の荒波にさらされるようになった現代を生き延びてくうえで必要となる情報分析能力を身につけることが出来ると考えたため。
- 6 今後も4に書かれてあるようなゼミ
- 7 PCスキルの高い人、あるいは今後PCスキルを磨きたいと考えている人。SNSデータ分析に関心があり、かつツールを使って分析することに関心がある人。プログラミング言語、Python(もしくはR)を用いた機械学習に関心がある人。

林 怡蓀



- 1 社会情報学、マスメディア研究、ジャーナリズム研究
- 2 マイノリティとジャーナリズム
- 3 台湾にて二泊三日。AMA「女性と人権記念館」、中正記念堂や順益台湾原住民族博物館を見学。輔仁大学のラジオ局に訪問、番組収録に参加。小籠包やマンゴークッキーを堪能。
- 4 穏やかで、まとまりがある。
- 5 ドキュメンタリーがゼミのテーマであったから。またゼミ合宿が台湾で行われるから。
- 6 何でも言つて良いような雰囲気の中で、自由に議論と意見交換ができるゼミ。
- 7 積極的にゼミの運営に関わりたい学生、社会問題とメディアの在り方について探求したい学生。

生井 英考



- 1 政治社会学、映像人類学、アメリカ研究
- 2 日米の政治コミュニケーション
- 3 春学期は研究休暇中の生井先生に代わり、岡田陽介先生のもとで政治社会学についての基本文献の講読を中心に、共同研究の基礎固め。秋学期は生井先生のもとで共同研究のテーマとして「ドキュメンタリー映画に描かれたアメリカ政治とコミュニケーション」に取り組む。
- 4 今年は人数が少ないので、そのぶんお互いの距離が近い。サボれないということでもある(笑)。
- 5 自分たちでテーマ選びからおこなつて、自分たちのゼミを作るという点に魅力を感じたため。
- 6 ゼミ生全員がそれぞれ「大学生活の中心はゼミ」と思うゼミ。

7 世界を知りたい、と焦っている若者。

砂川 浩慶



- 1 メディア論、放送制度論、放送産業論、ジャーナリズム論
- 2 メディア産業論、制度論
- 3 長崎にて三泊四日のフィールドワーク活動。五つの班に分かれ、学生自らテーマ設定し調査。最も調査成果をあげたチームは「長崎、鯨食べるとよ。」
- 4 非常に快活。お互い素直に意見を言い合うため、プライベートでも遊びに行くほど仲が良い。先生のが大好き。
- 5 テレビ業界の就職を志していたため。
- 6 「抜きん出たヘンな人になろう」をモットーに様々な経験、思考を通じて、「自ら考え行動できる人」の養成を目指す。
- 7 好奇心旺盛な人。様々な個性が集まることで、良いゼミとなる。色んな人に入っ
てほしい。

黄 盛彬



- 1 メディア・文化研究、グローバルコミュニケーション論
- 2 メディア・文化・社会
- 3 「伊東」にて卒論中間発表会。初日は、各自現在までの進捗状況を報告し、報告後はゼミメンバーや先生からフィードバックを頂く。二日目は、初日を踏まえた上で、今後の進め方や内容の改善点を各自改めて報告。
- 4 全体的にとっても落ち着いていて、真面目な方が多い。ゼミ活動中は、積極的にお互いに意見を出し合い、ゼミ後はプライベートな話題で盛り上がる。雰囲気は落ち着いていても、一緒にいると楽しい方ばかり！
- 5 ゼミテーマに強く興味を感じたことが一番の理由。メディア社会学科のゼミの中

- で、グローバル的分野をゼミ研究内容に揭げているところはあまりなかったため。また、先生も韓国出身の方で、自分も韓国文化に興味があったため。
- 6 ゼミの輪読文献をしっかり読んで、討論できるゼミ。忌憚なく自分の意見を話すことができ、他人の意見に耳を傾けることができる雰囲気。ゼミ。
- 7 オープンマインドで、寛容の精神を共有し、人と世界への好奇心を持っている人たちが集まってほしい。

編集…入江 美帆、丸尾 葉那、渡邊 ひなの

専門教育選択科目1の紹介

一〜二年次で取ることが多く、各領域のイントロダクションにあたる「専門教育選択科目」。今回はその中から、三科目をピックアップし、ご担当の先生方にお話をうかがいました。

社会学科 成熟社会論



天田 城介 教授

所属：中央大学文学部社会学科専攻
専門：臨床社会学、歴史社会学
著書：『〈老い衰えゆくこと〉の社会学』（多賀出版、2003年）
『老い衰えゆくことの見見』（角川学術出版、2011年）

今年度から成熟社会論を担当します。専門教育選択科目1は、各学科を横断した「社会」を学ぶ入り口となりますので、

できるだけひろい知識を、分かりやすい授業にしたいと考えています。授業のポイントは大きく分けると三つになります。

第一に、超高齢化と人口減少が私たちの社会のあり方をどう変えていくのかということを学んでいく点です。第二に、一九九〇年代以降における「ポスト経済成長時代」とでも呼ぶる時代、つまり右肩上がりの経済成長が期待できない時代で未曾有の高齢化が生じ、かつ人口も減少していく。これはどのような社会変動なのかということをお話します。三つめは、低成長時代で、超高齢化／人口減少が進むなか、どのような分かれ合いができるかということをお話します。つまり、どうやって私たちは誰もがつつがなく生きていける社会を社会的に構想することができるかということが「成熟社会論」のテーマです。ポスト経済成長時代における超高齢化／人口減少における新たな社会設計を「成熟」という視点から見えていく、というふうにご講義を展開していきます。最後は社会のシステムのあり方についてお話しします。同時に、一人の個人として当事者の世界を生きていくことと、社会が作り出すシステムがどのようなつながりを持つのかということをお話したいと思います。

講義ばかりではなく、後半からはドキュメンタリーや新聞や雑誌の記事などを使いながら、できるだけ具体的なケースを読み解いていきます。例えば、人口減少の地方の現実、外国

人労働者問題、世代間関係をめぐる社会問題、女性の貧困などの具体的事例を実際に分析していくのがこの授業の目玉になります。

この授業は、家族や社会保障、それと労働に関心がある人には受けてほしい。別の角度からだと、現代史・戦後史の視点から、私たちの戦後の社会システムがどのように生まれてきたのかに関心がある人たち、あとは当事者や現場のリアリティに関心がある人たちに履修してもらえたら嬉しいなあと思います。

「社会学」を一言でいうと、私は「自由」を与えてくれる学問だと思っています。われわれが社会でそういうもの、仕方がないと思っています。われわれが社会でそういうもの、仕方が可能であると考えられる自由を与えてくれる。そう考えると、ポスト経済成長時代における超高齢化／人口減少という現象も、「しぼんでいく」という見方ではなく、別の選択や新しい生き方、新しい社会のあり方が可能であるというふうに見えることのきっかけになる授業になれば嬉しいのです。

(取材・編集 江村 知子)

現代文化学科 文化の社会理論



木村 自 准教授

所属：立教大学社会学部現代文化学科

専門：文化人類学、ディアスポラ論、
地域研究（中国、台湾、東南アジア）

著書：『雲南ムスリム・ディアスポラの民族誌』
（風響社、2016）

「文化の社会理論」は、文化人類学の基本的な考え方を学ぶ授業です。文化人類学というのは、他者の目を通して異文化を理解し、ひいては自分たちの生きる社会の文化や制度を見直そうという学問です。

「異文化」ってどこの文化かというと、文化人類学っていう学問が始まった頃は、アフリカやアジア、中南米とか、近代の西洋からみて「未開」だと思われていた地域の文化です。日本を含めて西洋列強が植民地化していった地域ですよ。

そうした地域を目にした西洋人たちは、自分たちの生きる社会とは全然ちがう家族観があったり、信仰の体系があったり、生業があったりして、驚いたんです。

で、西洋人たちはどう考えたかという点と、彼らは遅れてるんだ、「未開」なんだ、だから西洋と違うんだと。こんな「未開」地域だって、じきに「進化」して西洋社会みたいになるんだと考えた。こうした考え方を「進化論」と言いますが、これが文化人類学という学問が体系化された始まりです。

こうした単純な「進化論」的考え方は、その後完全に否定されます。「未開」という言葉も、現在使われません。文化的な多様性というのは、その文化を生きる人々の視点から、その文化を生きる人々が歩んだ歴史的文脈を通して理解する必要があるという考え方が、現在の文化人類学的考え方の基礎です。こうした考え方を「文化相対主義」と言います。

文化相対主義を踏まえて、じゃ、多様な文化の違いをどうやって理解するんだらうか、文化の違いを超えて通底する理論的な枠組みってなんだらうか、ということも「文化の社会学理論」では考えます。授業では、親族、宗教、ジェンダー、儀礼、自然観などトピックごとに、異文化の事例と私たちに身近な事例を対比させながら、文化の多様性とその多様性を理解するための理論的枠組みをお話します。

他の授業にも共通して言えるけど、色んなことに関心を

持つて、自分を相対化できる人がこの授業に向いているでしょう。「異文化」の事例をメインに扱う点が社会学部の他の授業と異なっていると思うので、自分が「不思議だ」と考える文化のあり方に共感を覚えて、受け入れることができる人はこの授業に興味を抱くだろうし、来てほしいと思います。日常生活のなかで感じる喜怒哀楽などの小さな事柄から、政治や経済、科学や自然環境にいたるまで、私たちの生活のあらゆる側面は社会や文化という切り口から考え直すことができます。社会学部で学ぶことの楽しみは、そういう点にあるのではないでしょうか。日々の生活のなかで湧き上がる疑問や悩みから問いを発し、その問いを社会や文化の問題として考え抜く。それが、社会学／文化人類学という学問なんです。

(取材・編集 江村 知子)



木村 忠正 教授

所属：立教大学社会学部メディア社会学科
専門：メディア・コミュニケーション論
著書：『デジタルネイティブの時代』（平凡社、2012）
『ハイブリッド・エスノグラフィー NC
（ネットワークコミュニケーション）研究の
質的方法と実践』（新曜社、2018）

この授業では、人類史的な流れと、新しいネットメディアの勃興・発展を踏まえて、メディア・コミュニケーションが人類にどのような役割を果たし、今はどのような現状であるのかを扱います。

人類は、コミュニケーションを媒介する多様なメディアを創り出し、創り出されたメディアと媒介されるコミュニケーションが、社会を大きく変革し、形成するという、種としてとても興味深い特徴があります。人類史を振り返ると、声が

基本にあって、その後に文字ができました。文字は長年、木や石に書きつけられていましたが、印刷技術が発明され活字となります。この活字、出版技術が、近代社会を生み出す巨大な変革の中心の力となりました。

十九世紀から二〇世紀には電子メディアが開発され、ラジオやテレビなどの映像文化が開花し、前世紀から今世紀にかけてはデジタルネットワークが百花繚乱です。

ただ、どんなメディアであっても、話かけられれば、メッセージを送られれば、返事（返信、リプ）が必要だと感じ、未読無視・既読無視が気になるのは、お互いに社会的な動物として協調しようと、私たちが霊長類の時代から積み重ねてきたコミュニケーションの様式が依然として大きな役割を果たしているからです。そうして連続性にも目を向けることが大切です。

私の研究テーマの一つが、デジタル・ネイティブです。私の研究では一応、一九八〇年以降に生まれた人をデジタル・ネイティブと定義していますが、世界中でみると、六割を超えています。

ところが、今の日本において、デジタル・ネイティブはまだ三分の一くらいしかいません。世界全体は、もうデジタル・ネイティブの社会になってきているけれど、日本は、高齢化と少子化と長命化が組み合わさって、デジタル・ネイティブ

の力が弱い社会になっているんです。

インターネットは高い利便性をもたらす一方で、情報操作やプライバシーの侵害、さらにはAIと組み合わせることで、私たちがコントロールできないような自律的な空間の可能性もでてきます。日本社会では、デジタル・ネイティブ世代が未だ少数派だからこそ、過去・現在のメディア・コミュニケーションについて、良い面、悪い面、両面とも積極的に学び、理解して、これからの社会を構想してもらうことが重要だと思います。

（取材・編集 江村 知子、服部 莉奈）

助教座談会

〈助教の先生方紹介〉

脇田彩助教（社会学科）

矢吹康夫助教（社会学科）

池上賢助教（メディア社会学科）

横山智哉助教（メディア社会学科）

須永将史助教（現代文化学科）

田藤裕祐助教（現代文化学科）

「助教ってよく聞くけど、なんなの？」

学部生なら一度は思ったことがあるのではないだろうか。

教授より学生に近い存在のような気もするが、それでいてよくわからない人達。そんな彼らの生態を、語っていただきました。（スケジュールの都合で四名の先生になりました）

——早速ですが、助教と教授の違いとは？

池上 職位だね。うん。

矢吹 いや任期でしょう（笑）。

池上 そうですね（笑）。助教ってもともと任期が決まっています、うちだけじゃなくて他の大学も大体そうなんだけど、長

くても十年、短くても三年くらいなんだよね。

——それは学校ごとで違うのですか？それとも学部ごとでも違いがあるとか？

矢吹 学部ごとで違うみたいですよ。

脇田 そうですね。任期の長さは。

池上 で、大学によっては任期が終わったらそのまま…っていうキャリアもある。なんか世知辛い話から始まったね（笑）。あとさ、助教っていったい何のポジションなんだろうねそういうえば。僕も良く知らんのだが。

矢吹 助手の代わりに助教になったんじゃないですか。

池上 なるほど。てことは理解としては、教授を補佐するポジションってことでええの？

矢吹 いや、そうじゃないから新しく助教を作ったって話なんじゃないですか？

池上 そこらへん微妙なんだよね。も

ともとは助手つっこのがあつたわけですよ。

矢吹 どなたかご存知の方は？

池上 田藤さん詳しくそう。知らない？

田藤 知らない。

池上 もともと助手っていうのは、名前の通り偉い先生の助手だったわけですよ。で、事務仕事だったり研究の手伝いとかやらされてただけども、たぶんそれで文科省かどつかが、下働きとして使うんじゃないみたいなことを言い出し



池上先生

て、で助手と助教に分かれたんだよね。

——じゃあ昔は三つあつたわけですね。

池上 いや昔は、場合によっては講師があつて、助教、教授だったのよ。それが変わつて、助手もしくは助教、講師、准教授、教授になったの。

——普段お仕事されている中で、教授とはこんなところが違うとか感じられる場面つてあつたりしますか？

矢吹 大学によって違うんだけど、多分持てる科目が違うと思う。

池上 そうだね。ここでは大学院科目は持てない。

矢吹 三年四年ゼミも助教はないですね。全カリつてあるんですか？

池上 全カリは調整の結果持つこともある。社会学への招待とか。

田藤 だから学年の低い基幹科目（社会

調査法など）は助教の方が持つこともあり、卒論とか専門演習とかは専任の先生が持つてる。その他講義科目はそんな区別はない。

——普段の一日のお仕事の流れつてどんな感じですか？

池上 朝大学にやってくるじゃん。研究室につくでしょ。パソコンつけるでしょ。でニコニコ動画みるでしょ。

田藤 ちよつと、一緒にしないでくださいね（笑）。

池上 それで朝飯食つてそのあとメール見て。僕は午前中に大体事務処理とかをすることが多いな。午後で時間ができたら自分の研究とかやる。

矢吹 へえ。さすがうまいなあ。池上さんの本棚に、『できる研究者の論文生産術』つてのがあるのもうなすける。

脇田 あ、あれ良い本ですよ（笑）。

池上 そうなんだ（笑）。買ってからまだ

読んでないや。

矢吹 僕も買いましたけどまだ読んでない(笑)。

池上 あと、研究とかがガチで詰まってるときは、金曜とか土曜にも学校に来てガーッとやるかな。普段の平日は、僕は授業準備とかに追われていますね。

矢吹 僕は大体昼に来てますね。午前中授業がない日は大体昼に来ます。何してらんでしょねえ：「twitter やってる(笑)」。結構な時間見てるなあ(笑)。

池上 矢吹くん、確かにつぶやく頻度多いよね(笑)。

矢吹 まあでも授業準備：こつちじやないといけないことを多くやってるようなかんじですかね。

池上 ちなみに私は仕事は基本的にこつち(学校)でやるので、家でやるってことはないですね。皆さんは？

田藤 授業があるときは大体朝十時からいに来て、で、ひたすら授業準備。特に前期は四コマ+他の大学でも授業をして

いるので。

脇田 すごい…。

田藤 で、余った時間で自分の研究をして、十八時くらいには帰る、みたいな感じですかね。夏休み入る前の時期はひたすら採点。で、集中力が切れたら適当に自分の研究をする、みたいな。夏休みに入ったら、インプットする仕事を午前中にやってアウトプットする仕事を午後にするって感じかな。あんまり「twitter とか Facebook は見ません(笑)」。

脇田 私も大体一緒で、基本的に、研究、教育、事務作業と仕事はいろいろあるわけですけど、その中でも研究の時間をなるべく取りたいわけなんです。なんです、教育と事務作業はどうしても入ってくるので、それは大学でこなさなきゃいけないんです。私も基本的にあんまり早く来たくないので、授業があるときは早く来るのですけれども、それ以外は昼くらいに来るようにしています。まあ今は特に採点ですね…。で残った時間で研

究をします。私はけっこう遅くまでやることが多いですね。研究に関しては、家でできることもあります、本がたくさんあるのと、図書館が使えるという点で大学にすることが多いです。

——助教室って、教授の研究室と違って皆さんと一緒に仕事をされていますが、普段はどういった雰囲気なんですか？

池上 ご一緒というか、共有してる感覚はないね。

田藤 だっているかいなかかわかんないもんね。

矢吹 池上先生はよく独り言を言うのでわかります(笑)。

脇田 一応扉の所に在室してるかどうかのプレートがあるんですけど…(笑)。

私は誠実に使ってます！

田藤 僕も誠実に使ってますよ(笑)。みんな黙ってやっているとときは本当にわか

らない。

——意外ですね！皆さんワイワイやっているものかと思ってきました（笑）。続いて、助教で良かった、もしくはもう嫌だエピソードはあったりしますか？

矢吹 うーん。収入が安定していること（笑）。

脇田 確かにそうですね。

池上 つまりどういふことかかっていうと、ポスドクっていうのがあって、それは大学院を出て専任にはなっていない状態のことなのね。助教は任期はあるけど一応は専任だからさ。で、僕は4年間ポスドクやって、生活がカツカツで。いくらとは言わないけど助教になったら給料が倍以上になったからさ。それで生活がガツと安定したね。それまでトリプルワークしてたもん。

矢吹 つまりポスドクは、授業一コマいくら、みたいなのをいくつかけ持ちし



矢吹先生

ているような状態、つてことですね。

池上 そうそう。来年もこの科目の非常勤があるかないかってのが結構直前までわかんなくて、いくらくらい来年収入が得られるのかもわけわかんないのよ。生々しいでしょ（笑）？ トリプルワークでやってたのは会社員と塾講師と立教とかの非常勤。会社員を昼間にやって、帰りに大学によって授業の準備をして帰るといふかなり無茶な生活してた。やばかった（笑）。

矢吹 ほらほら、ここらへんでみんなに夢を与えるために良かったことを：

（笑）。

脇田 うーん。みんなあんまり大学院に進学しないですもんねえ…。

田藤 でも立教の助教の待遇は良いと思う。他の大学のことはよく知らないけど、下手すれば他の大学の専任の人よりもいい環境で研究できてると思う。

脇田 研究環境は本当にいいですね。

田藤 お金がないと社会調査はできないし、研究もできない。大事なんですよ。その意味では恵まれていますね。

矢吹 助教座談会、金の話はつまり（笑）。

脇田 お金の話をすれば、ここまですぐなくなってしまうというのがありますよね。まず大学を二十二で卒業して、大学院で修士は二年、博士で年限は三年ですけど、三年で出ている方はいらつしやいませんよね。

池上 五年くらいだったかな。僕は。

脇田 そうですよ。で、その間は学生で。払うほうつてことですね。そのあとポスドクとかをやって助教になって、任期

はあるものの定職定収の状態になったのが、何歳かなあ…ってとこですね。それまでに失っているものも多いですし(笑)。

矢吹 失っているもの(笑)。

脇田 かつ、そのあと就職活動しなくてはいけないので、お金の面では得はないですね。

矢吹 ここにきて初めて就活をしているわけでもんね。

池上 YouTuber じゃないけどさ、好きなことで生きていくのは大変なんですよ本当に。

——助教の方って、兼任される方は多いんですか？

田靡 みんなやっていますね。

矢吹 前任者や先輩から降りてきたり、普通に依頼されたり。

池上 兼任していると研究時間は減るけど、欲しいもんは欲しいからさ(笑)。

田靡 でもまあ授業の手持ちが多ければ大丈夫。ここでやってる社会調査法とか専門演習とか、そのまま早稲田でやったりするし。

矢吹 だってほら、九十分×十四コマ分のプレゼンを毎回考えていくのは…ねえ。

池上 ほんとはやりたいんだけどね。

田靡 え、やりたいいっすか？(笑)

池上 やりたいよ！講義大好きだもん。だってさ、九十分間自分の好きなことずっとならべつていいんだよ！？

脇田 そうい講義もありますね(笑)。

田靡 それを見るのが楽しい(笑)。

矢吹 僕は初めての時は、一週間かけて一コマでさるって感じだったなあ…。九十分のために、二、三時間かけてるわけですよ。アドリブなしの読み上げ原稿作ってたからなあ。

池上 それは先生によるかもね。おれはレジュメ切っちゃってあとは完全にアドリブだから。あとは授業用メモなんかに

ここでこの話をするとかって感じで書いておいてるかな。基本的にはアップトゥデートしながら進んでいきます。

——本当に研究の時間がなくなってしまうような感じですね。

脇田 でもそれは助教に限らず、多くの研究者が思っていることだと思います。教授に何やりたいか聞いてみたら、きつと研究って答えるんじゃないですか。

池上 昨今一般的に言われているのが、大学の教員は忙しすぎるってことがよく言われていますね。助教とかもちろんそうだけど。事務仕事とかが多くなりすぎて、研究ができなくなってしまう傾向にある。

——意外ですね。現実には厳しい。そうすると非常勤とかの方が研究できたりするんですか？

池上 非常勤はお金もないし、学校でやる権利もないからあんまり。所属すれば助成金をもらえたりするんだけど、非常勤だともらえないってところが多いよ。

——皆さんがどんな大学生活をおくってきたのかぜひ教えていただきたいです。

池上 おれは去年の社会学部報で答えるからいいや(笑)。

矢吹 僕、自分の本『私がアルビノについて調べて書いた本』二〇一七年、生活書院)の序章に書いたんですけれども。あの、読んで(笑)。

脇田 学生時代かあ、昔のこと過ぎてあんまり覚えてないですね(笑)。

田麻 僕は絶対にサラリーマンとか無理だと思って。一応就活はしたんですけど、とある銀行の面接まで行って、もうその時点でもなんか嫌気がさってきて面接でも大学院に行くって言っちゃってそっからですね。

——教授になりたいよりも就職が嫌で大学院に行っちゃったことですか？

田麻 嫌って言うのと語弊があるけど、なんか違和感があった。

脇田 いやあ、私は能天気でしたね。修士に入る時はもうちよっと勉強したいくらいな感じなんで、ノリとしては軽かったかもしれないですね。学部の時は一応就活もしたんですけど、まあ途中でやめてしまっただけで、それで修論書いたあたりで



脇田先生

はもうこっぴどいかなという気持ちになっちゃいましたね。

池上 一応僕は就職してます。

矢吹 僕はしてません。就職という選択肢はなかったです。まあ本に全部書かれてる(笑)。

——今後の野望とかはありますか？

矢吹 新書とか出したいですね。

池上 あ、俺も出したい！ 新書で儲けたい。

脇田 それはたしかに良いらしいですね！

田麻 儲けるには流行語考えるのが手っ取り早い。

脇田 あるいはテレビ出るとか(笑)。

池上 まあマジレスするとテレビとか新書ばっか出してる浮かれてる社会学者を叩きたいってない？(笑)

脇田 ないです(笑)。

田麻 自分が教えてもらっていた指導教

官っているわけじゃないですか、そういう人がいきなりテレビに出てきたり、何か新書で変なこと言ったりすると何かモヤモヤした気分になるわけですよ。

脇田 まあ世間的の認識としては一味ですからね。研究者で自己紹介するときに最初は、専門なんですかテーマはなんですか、次ぐらいにじゃあ指導教員は誰ですかねーってなる。

池上 そういうふうに言われてグループ分けされる

——その指導教員の方って自分で選ぶんですか？

脇田 そうですね。まあ皆さんも卒論の先生選ぶじゃないですか、それと似た感じですよ。研究概要とか研究室の雰囲気にもよりますかね。指導教員の先生と共同研究とかされました？

矢吹 共同はないです。

池上 僕、逆に多いですね。師匠面倒見

がいいから(笑)。

脇田 池上先生の師匠は、是永先生なんですよ。皆さん知らないと思うんですけど。量的調査とかだと指導教員の先生が加わっている大規模な調査に加えてもらえるところからデータが得られるって言うところもあります。だから、偶然も含めて指導教員の先生にすごくお世話になることもありまして、反対に指導教員の先生に全然指導されなかつたっていう方もいらつしゃいますね。つながり方はそれぞれですけど外面的には誰々先生の弟子の誰々さん、っていうのが最初は特に見られるところもあると思いますね。

——学生に伝えたいメッセージなどあればお願いします。

田藤 学生に伝えたいことか…。

池上 生きづらさがよく言われる現代社会ですが、立教の社会学部を学ぶことで、

サバイブ術を身に付けていただければと。

田藤 そんな教えてたっけ(笑)。

池上 教えてないけど(笑)。

田藤 でもなんか池上先生教えてそうだな(笑)。

池上 でも大学で勉強することってそういうことだと思っんですよ。例えば実際に社会学の知識でサバイブできるわけでもないけど、社会に出て理不尽な目にあつたときに自分が間違ってるって思っちゃやみたいな話ってよくあるじゃないですか。典型例ではブラック企業にいて、お前が間違ってるって言われたりとか。でもそんな時社会学をやっていると、いやでもこれはどう考えても会社の方が間違ってるだろう、よし、労基署に行こうとか、さっさと会社を辞めようとか、言えたりするわけで。

矢吹 できるできる。大事大事。それは社会学が一番大事だと思いますよ。悪いのは私ではない。社会構造だって言える(笑)。

脇田 そういう視点もあつたほうがいいのかなって思います。

矢吹 まあ僕は学生には、全然ドロップアウトしてもいいんじゃないかって事は言います。僕も大学退学してるので、入り直したりとかしてるので別に全然いけますよ。四年で卒業できなくても別に死なないし大学退学しても死なないし。でも初めて立教来たときに、ここの学生は新卒採用されないと死ぬくらいの勢いで就活やつてるでしょ。あの窮屈さから解放されたらさぞ良いだろうとは思いますが。寄り道してなんぼですよ、人生なんてね。なので、いいんですよ、四年で卒業しなくて。

脇田 でも私は学生には逆のメッセージを出してしまつてるかもですね。もうちょっと真面目にやつたら良いのに、と思うことは多少あって、やっぱり立教の学生さん能力はあるけど、まじめにやるのがカッコ悪いって思つてるのかなって思うことはあります。

池上 ああそれはある！

脇田 単位を要領よくとる、本音はそれで良いと思うんですけど、それ以上にやつてみても面白いんじゃないかなーと思うこともありますね。でも、そうやってガタガタ言われてもやるやらないって自分で判断したならそれでいいと思ってるんですけど（笑）。

矢吹 ま、僕は自分の本のタイトルさえ入れてくれればそれで（笑）。

田藤 宣伝ですか（笑）。

池上 僕、二〇一八年中に、『彼らがマンガを語る時——メディア経験とアイデンティティの社会学』ついでいうのがハーバスト社さんから出るついでいうか出せたらいいなあみたいなのはあります。あ、あともう一個あるんだ！えーつとね、ちようど昨日メール来てたわ、そうだ、それ宣伝しよう絶対出るから！

矢吹 なんですか、新聞ですか、今回は。池上 新聞じゃない。教科書。

矢吹 あーいいですね！

池上 北樹（ホクジユ）出版社からですね、『現代文化への社会学——90年代と今を比較する——』ついでいう本が出るんだけど、漫画の章を担当を担当しているのを読んで（笑）。

脇田 もちろんです。他に授業関連とかでありますかね？

矢吹 自主講座という、被災地にフィールドワークに行く定員二十人の科目なんですけど、もし被災地に行つてちよつとインタビュしたりとかフィールドワークしたりとかついでいうのが興味がある人がいればぜひ。



田藤先生

——時間遅いやつですよな？

矢吹 時間遅いやつですね、うん。ただ、

旅費の補助とかかなり出て、自己負担は
だいぶ少ないですね。そこはなかなか良
いと思います。まあ立教は他にもいろん
なプログラムで行けるんですけどね、た
ぶん陸前高田とかだと。まあただそれと
はまた別に、たぶん来年も大槌町とい
うところに行きますので、よろしければ。
池上 うん。お二人は？ 意外と知らな
いですよ。

脇田 講義は私は一つだけで、少子高齢
社会論っていうのを秋学期に持つてるん
ですね。これはわりと人は居るほうです
ね。まあデータを見て驚いていたたくっ
ていうっていう講義なんですけど、少子
化は、勢いって本当にすごいので、皆さ
んびつくりされますね。最近の、とい
うかまあこの先の社会を見通す上では一番
大事なのって過言ではないような人
口構造の変化かなと思っています。まあ

教室がパンクしてしまうと困るので、積
極的には宣伝したい訳じゃないんですけ
ど(笑)。

矢吹 去年何人くらいでした？

脇田 去年はそんな多くなかったんです
よ。六十、七十くらいだったと思います
ね。

——コメントペーパーみるだけで大変だ
ろうなっていうのも思います。

脇田 あー！ まあでも気付くことは多
いですね。ここはわからなかったんだと
か、良い質問がくることもありますし。
こちらにも気付かされることは多いです
ね。

田藤 私は講義持っていないです。授業
中にスマホを持っていないと死んじゃう
病の人がたくさんいるので。あれはどう
にかしたいよね(笑)。

脇田 でも最近難しくなってますか。

田藤 私話よりも、スマホを見ないと死

んじゃう病の方がまずいっていうか、病
気に近い物があるよね(笑)。

矢吹 僕もうなんか配るのがめんどくさ
いから全部ブラックボードで自分で見
ろってことで、スマホで見えていいよって
言ってるんですけど。

田藤 スマホで見えていいよっていうのは
見分けがつかなくなるし、プレゼンする
ときもこれを見ながらプレゼンする子い
ますよね。

脇田 あーいいますいます。

田藤 まあでも使いこなすのはいいんだ
けど……。

池上 僕、逆に気にしないわ。実際、社
会学原論で一年生に、レジユメに載つけ
忘れた図表とか出して別に撮りたきゃ
撮っていいよって言ったらみんながパ
シャパシャ撮りだしてちょっと面白かつ
た(笑)。

田藤 なんか全部受け身になってますね。
写真を撮るのは受け身だけどノートと
るって一回自分の頭を通してとってる訳

だから、能動的に、授業に関わっていく
んだけど。スマホで情報得るとかスマホ
で撮るとかそれだけで終わっちゃうって
いう受け方になっているんで。

池上 それは確かにあるよね。それに関
連して僕とかは割とレジュメをきっちり
つくるほうなんだけど、

脇田 あー、穴埋め式で？

池上 そうそう穴埋め式できっちりつく
るんだけど、穴だけ埋めて満足してる学
生とかいて、それをさらに理解するため
にいろんなことしゃべってるのに誰もメ
モとってないんだよね。それはもったい
ないな。

脇田 たしかにちょっとメモを取らなく
なった人が多いかもしれないですね。

田藤 メモどころかペンすら出してない。
レジュメって何のために配っているかて
いうとメモとってもらうために配ってる
んで。

池上 そうそうメモは取ろうよ。そうだ、
話変わるけど言っておきたいのは、先生

に興味を持ったらは是非ともCITEで論文
をググってくれと。

脇田 あー、それはあんまりいい(笑)。

池上 え(笑)。いや見られたくないの？

田藤 いやあまあ別に良いけど。

池上 みんなちゃんと論文は書いている
ので、いない二名もあわせて助教六人
ちゃんと仕事しているの、その成果を
ぜひとも学生に読んでほしい。

脇田 でもなんか、専門演習とかで、何
個も何個も僕の論文使って卒論とか書い
てたよつつつて村瀬先生に言われたりす
るからたぶんみんな見てますよ。

池上 うん。まあ助教だけじゃなくて他
の先生もそうだから。

脇田 そうですよ。研究者としての先
生達の姿っていうのは、意外と知られて
ないかもしれないですね。

脇田 立教の先生ってわりとわかりやす
い本書いている先生も多いし、教科書執
筆されている先生も。研究をしつかりさ
れている先生が多いですね。

池上 こんな感じですかね。あと僕の
発言は極力カットしておいてください。

脇田 矢吹えー。

脇田 もう論汗の如いですよ。

脇田 なら匿名助教Aで(笑)。

池上 ばれるって絶対ばれるって(笑)。

矢吹 なんか最後長くなってしまったが、
我々はこんな感じでやっています(笑)。

池上 まあ僕らがしゃべったんだから次
は君らにしゃべってもらおうかな？

——それはまた次の機会で(笑)。あり
がとうございました！



(取材・編集 伊藤 元彦、松本 和花子、渡邊 ひなの、戸川 凜葉)

編集部だより

二〇一八年度の立教大学社会学部『社会学部報』をお届けいたします。創刊準備号、創刊号と増加し続けているページ数ですが、今年度は見ての通りの厚さとなっております。いま計算してみました

ろ、ちょうど年々、大体一・五倍ずつ増加しているようで、学生のみなさんの学部報企画に対する熱意を改めて感じました。ただ実はその「熱意」ゆえにか、編集作業は非常に難航しております、この編集後記執筆中も作業は完了しておらず、ややハラハラしている現状です。みなさまのお手元に無事、この号が届いていることを祈りつつ、そのような「手作り」感あふれる『学部報』へのみなさまの変わらぬご声援をどうぞよろしくお願ひいたします。また最後に、このような慌ただししい編集作業にお付き合ひしていただくことになってしまっている、望月

印刷株式会社さまに深く感謝の意をお伝えいたします。
(社会学科教員・片上平二郎)

『社会学部報』は、今回で第二号の発刊となりました。創刊準備号、創刊号に続いて三回目の刊行です。今年度の『社会学部報』は、より「学生主体」の雑誌になったのではないかと私は思います。学生が知りたいことは何か、読んでいて面白いだけでなく、ためになる記事はどんなものか、自分の知らないことに出会わせてくれる雑誌であるか、など様々なことを学生目線で、学生主体で考えて今号が出来上がったと感じています。また、編集部員体制も同じように学生主体となり、副編集長の大澤を筆頭に皆で協力しあって一つの雑誌を作ることができました。まだまだできたばかりの団体で、整っ

ていない部分が多く、編集部員には迷惑をかけることが多かったのですが、皆よく頑張ってくれました。感謝しています。さて、『社会学部報』を読んでいたって、こんなOBがいるのか、先生たちって意外な一面も持っているんだな、こんなゼミもあるのか、など人それぞれ感じるものがあるかと思えます。その気持ちを大切にしていたみたいです。私はこの雑誌を通じて、立教大学社会学部がどんな学部なのかを学生にもう一度見つめなおしてほしいと考えています。なんとなく卒業する、のではなく、せっかくなので学部で学ぶのだから、学部に関して知らないことや面白いところをもっと知っていたいただきたいのです。そしてそれが、皆さんの大学生活が豊かになることにつながると良いなと思っています。パンフレットだけではわからない社会学部の良

さを、我々は今後も発信していきます。

(編集長・伊藤 元彦)

今号において、社会学部報は初めて学外の方にOB訪問を行いました。編集部員の熱意と、関係各所の皆様の協力により叶いました肉厚の記事となっております。もちろん、今までの蓄積をさらに昇華させた先生方へのインタビュー・寄稿も詰まっております。社会学部関係者に限らず、多くの方にとっていただければ幸いです。

(副編集長・大澤 崇仁)

慣れない作業がございましたが、学部生の皆様に良い記事をお届けできたと思います。特にインタビュー記事は、読み応えがある内容となっておりますので、ぜひご覧ください。最後に、取材をお受け

いただきましたすべての方に改めましてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

(編集部員・日出 恵輔)

〈編集部員募集中!!〉

『社会学部報』は、学生による学生のための新しいメディアです。学年や経験問わず、雑誌作成に興味のある方、学生に伝えたいことがある方などは大歓迎です！興味のある方は、[sociomagazine-member@rikyo.ac.jp](https://www.instagram.com/sociomagazine_member@rikyo.ac.jp)までメールを！
また、Instagramでは記事に関することをはじめ、随時学生のためになるような情報発信をしようと思っております。ぜひ、[sociomagazine_rikyo](https://www.instagram.com/sociomagazine_rikyo)で検索してみてくださいー！

社会学部報 第二号 2018

2019年2月12日

編集長 伊藤 元彦

取材・執筆 入江 美穂
江村 知子
大澤 崇仁
近藤 綱紀
戸川 凜葉
外村 りの
永井 大貴
服部 莉奈
日出 恵輔
松本 和花子
丸尾 葉那
吉原 優人
渡邊 ひなの
渡邊 理紗子
(五十音順)

印刷 望月印刷株式会社

〒171-8501
東京都豊島区西池袋 3-34-1
立教大学社会学部
学部報編集委員会 監修



立教大学

〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1